

第二百七十三條 特定ノ不善チ人ニ歸セサル誣罔又ハ公ケニ爲サ、ル誣罔ノ罪チ犯シタル者ハ二十四時ヨリ少ナカラス一週ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ二十「ピアストル」ヨリ少ナカラズ百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金チ言渡サル可シ

第二百七十四條 内科外科ノ醫師、製藥者、産婆又ハ其他何人ニ限ラズ其身分又ハ職業ニ因リ人ノ秘密チ托セラレシ者法律上ニ其秘密チ告訴ス可キヲ特定セシ場合ノ外猥リニ其秘密チ漏告シタル時ハ二十四時ヨリ少ナカラス一週ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ二十「ピアストル」ヨリ少ナカラス百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金チ言渡サル可シ

○第八章 盜罪

第二百七十五條 他人ニ屬スル動産チ盜ミシ罪チ名ケ盜罪ト云フ

第二百七十六條 夫婦ノ同居スルト否トチ問ハス夫其婦ノ物チ盜ミ或ハ婦其夫ノ物チ盜ミ又ハ子及ヒ卑屬ノ親其父母及ヒ尊屬ノ親ノ物チ盜ミ或ハ父母及ヒ尊屬ノ親其子及ヒ卑屬ノ親ノ物チ盜ミ時ハ其損失ノ償チ爲ス可キノミトス○前ハ記シタル景狀ニ於テ其盜罪チ助ケタル者又ハ其贓物チ全部或ハ一部チ隠匿シ或ハ己レノ利益ト爲シタル者ハ盜罪チ犯シタルト爲シ其刑ニ處セラレ可シ

第二百七十七條 左ニ記スル五箇ノ景狀チ合シ盜罪チ犯シタル者ハ無期ノ徒刑ニ處セラレ可シ

第一 夜間盜罪チ犯シ

第二 二人以上ニテ盜罪チ犯シ

第三 盜者數人又ハ一人露提ノ兵器及ヒ暗藏ノ兵器チ携ヘタル時



第四 盜者、人ノ居住シ或ハ居住ス可キ家屋又ハ房室或ハ其家屋

ニ屬スル房舎ノ外部ヲ破壊シ或ハ攀援シ或ハ偽鑰ヲ用ヒ

其家屋或ハ房室或ハ房舎内ニ於テ其罪ヲ犯シ又ハ文武官

吏ノ衣服ヲ借用シ或ハ官吏ノ命ヲ偽リテ其罪ヲ犯シ

第五 暴行ヲ爲シ又ハ兵器ヲ用ヒント脅迫シテ其罪ヲ犯シ

第二百七十八條 暴行ヲ爲シ且ツ前條ニ記シタル五箇ノ景狀中其最

初ノ二箇ヲ合シ盜罪ヲ犯シタル者ハ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

又前條ニ記シタル五箇中其一ノ景狀ナシト雖モ暴行ヲ爲シテ盜罪

ヲ犯シ其暴行ニ因リ人ニ傷痕ヲ遺シタル者ハ無期ノ徒刑ニ處セラ

ル可シ

第二百七十九條 夜間露提ノ兵器ヲ携ヘタル一人又ハ數人道路ニ於

テ盜罪ヲ犯シ又ハ晝間第二百七十七條ニ記シタル五箇ノ景狀中其

二箇ヲ合シ道路ニ於テ盜罪ヲ犯シタル時ハ其犯人無期ノ徒刑ニ處  
セラル可シ

第二百八十條 人ノ住居スル爲メニ非ス且ツ人ノ住居スル場處ニ屬

セスト雖モ塙塹植籬編籬溝ヲ以テ繞圍ヲ爲セシ場處ノ外部ヲ破壊

シ又ハ攀援シ又ハ偽鑰ヲ用ヒテ盜罪ヲ犯シタル者ハ有期ノ徒刑ニ

處セラル可シ

第二百八十一條 人ニ傷痕ヲ遺サス且ツ更ニ他ノ景狀アラスト雖モ

暴行ヲ爲シテ盜罪ヲ犯シ又ハ暴行ヲ爲サスト雖モ左ノ二箇ノ景狀

ヲ合シ盜罪ヲ犯シタル者ハ亦有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第一 夜間盜罪ヲ犯シ

第二 二人以上ニテ盜罪ヲ犯シ且ツ其中ノ一人又ハ數人兵器ヲ

携帯シ



第二百八十二條 左ニ記スル場合中ノ一箇ニ於テ盜罪ヲ犯シタル者ハ三年ノ時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第一 二人以上ニテ夜間盜罪ヲ犯シ又ハ晝間二人以上ニテ人ノ住居スル場所或ハ禮拜ノ爲メ設ケタル場所ニ於テ盜罪ヲ犯シ又ハ夜間一人ニテ此等ノ場所ニ於テ盜罪ヲ犯シタル時

第二 晝間一人ニテ人ノ住居セサル場所ニ於テ盜罪ヲ犯シタルト雖モ其犯人露提或ハ隠藏ノ兵器ヲ携ヘタル時

第三 僕婢ノ其主家ニ於テ盜罪ヲ犯シ又ハ其主家ニ來リシ者ニ對シ盜罪ヲ犯シ又ハ其主人ニ隨行セシ家ニ於テ盜罪ヲ犯シタル時又ハ工丁或ハ商家ノ使用ヲ受クル者或ハ年季ノ弟子其雇主ノ家屋制作場倉庫或ハ其通常職業ヲ爲ス場所

ニ於テ盜罪ヲ犯シタル時

第四 旅舍ノ主人水陸ノ運送人及ヒ此類ノ各人或ハ更ニ此等ノ者ノ使用ヲ受クル者其附記セラレシ物ノ全部又ハ一部ヲ盜ミシ時

第二百八十三條 陸地運送人或ハ水路運送人其搬運ヲ任セラレシ飲食品又ハ其他ノ商品ニ人ノ害トナル物ヲ混合シテ變造シタル時ハ亦三年間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ○又人ノ害トナル可キ物ヲ混合セサル時ハ一月ヨリ少ナカラス一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百[ピアストル]ヨリ少ナカラス五百[ピアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

第二百八十四條 田野ニ於テ物ヲ負戴セシメ車ヲ挽カシメ、駢行ニ用フル獸類或ハ大小ノ家畜獸或ハ農業ノ器具ヲ盜ミシ者又ハ繞圍ヲ



爲サ、ル物置ニ在ル薪、建築ニ用フル木材、石炭、半燒ノ石炭或ハ石礦  
ニアル石、池沼ニ在ル魚或ハ水蛭ヲ盜ミシ者ハ一月ヨリ少ナカラス  
一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第二百八十五條 既ニ刈收シタル穀艸或ハ地ヨリ産スル有益ノ各物  
或ハ堆積セシ穀物ヲ盜ミタル者ハ二十四時間ヨリ少ナカラス三月  
ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ○又夜間二人以上ニ  
テ右ノ盜罪ヲ犯シ又ハ一人ニテ車或ハ獸類ヲ用ヒ右ノ盜罪ヲ犯シ  
タル時ハ其禁錮ノ刑期ヲ増シテ一年ト爲スコト得ヘシ

第二百八十六條 未ダ地ヨリ刈收セサル穀艸或ハ地ヨリ産スル有益  
ノ各物ヲ籃或ハ囊及ヒ此類ノ物ヲ用ヒ或ハ車及ヒ獸類ヲ用ヒ或ハ  
二人以上ニテ盜ミタル時ハ其犯人八日ヨリ少ナカラス三月ヨリ多  
カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ○又前文ニ記スル景狀アラ

スシテ右ノ盜罪ヲ犯シタル時ハ其犯人二十四時間ヨリ少ナカラス  
一週ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第二百八十七條 盜罪ヲ犯ス爲メ土地ノ境界ヲ爲ス物ヲ除去シタル  
者ハ十五日ヨリ少ナカラス三月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處  
セラル可シ

第二百八十八條 鑰又ハ其他鎖ヲ開ク可キ器具ヲ用ヒ盜罪ヲ犯サン  
カ爲メ鑰ヲ贗造變造シ或ハ其他ノ器具ヲ造リタル者ハ三月ヨリ少  
ナカラス一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ但シ此  
規則ト特定ノ盜罪ヲ犯ス爲メ右ノ諸物ヲ造リシ者ヲ其相當ノ刑ニ  
處ス可キ規則ト相觸ル、コトナカル可シ若シ右ノ犯人鎖匠ヲ以テ職  
業ト爲ス時ハ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第二百八十九條 暴行ヲ爲シテ人ヨリ義務ノ證書或ハ義務ヲ盡クシ



タル證書ヲ奪ヒ又ハ暴行ヲ爲シ人ヲシテ強テ此類ノ證書ニ姓名ヲ  
手署シ或ハ鈴印セシメタル者ハ有期ノ徒刑ニ處ゼラル可シ

第二百九十條 此章ニ記列セサル竊盜ノ罪ハ三月ヨリ少ナカラス一  
年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處ゼラル可シ

第二百九十一條 此章ニ記シタル盜罪ノ犯人ハ其刑期ノ終リシ後五  
年或ハ十年ノ時門政府ノ監察ヲ受ケシムルヲ得ヘシ但シ註誤ノ  
刑ニ處セラレタル犯人ハ其例ニ非ラス

第二百九十二條 盜罪ヲ犯サント試ミ爲シタル者ハ現ニ其罪ヲ犯シ  
タルト同一ノ刑ニ處ゼラル可シ

○第九章 倒産ノ罪及ヒ詐僞ヲ以テ財ヲ奪フ罪

第二百九十三條 分散シタル商人故ラ其簿冊ヲ隠シ或ハ之ヲ滅却シ  
又ハ其財産ノ一部ヲ隠シテ債主ノ害ヲ爲シタル時又ハ其書類積書

ニ因リ或ハ口上ヲ以テ許認シタルニ因リ或リ證書類及ヒ辨明書ヲ  
故ラ出サ、ルニ因リ其實ハ負フヲナキ債ヲ負フタリト自カラ許認  
シ或ハ人ヲシテ許認セシメタル時ハ詐僞ノ倒産ノ罪アリト看做ス  
可シ

第二百九十四條 通常法律上ニ定ムル同罪ノ場合ノ外左ニ記スル者  
ハ詐僞アル倒産人ノ同罪人タリト看做ス可シ

第一 分産人ニ利スル爲メ其動産又ハ不動産ノ全部或ハ一部ヲ  
隠シ又ハ他所ニ搬運セシ者

第二 分産人ニ利スル爲メ詐僞ヲ以テ分産ノ訴訟手續ニ参加シ  
又ハ自己ノ名義ヲ用ヒ或ハ他人ヲ介入セシメ偽テ分散人ニ貸  
セシ金高アリト述フル者

第三 他人ノ名義ヲ借り或ハ偽名ヲ稱シテ商業ヲ爲シ此條ノ第



一項ニ記スル罪ヲ犯セシ者

第二百九十五條 詐偽ノ倒産人及ヒ其共同罪人ハ有期ノ徒刑ニ處セラ  
ル可シ

第二百九十六條 分産人ノ配偶者其尊屬及ヒ卑屬ノ血族並ニ姻族ノ  
親其分散人ト交通スルコトナク分散人ニ屬スル動産ノ全部又ハ一部  
ヲ隠シシ又タ他所ニ搬運シタル時ハ盜罪ノ刑ニ處セラレ可シ

第二百九十七條 疎忽又ハ重キ過失ニ因リ其債主ニ損失ヲ生セシメ  
タル商人ハ通常ノ倒産人ナリト看做ス可シ

第二百九十八條 左ノ諸件ハ疎忽又ハ重キ過失ナリト看做ス可シ

第一 自カラ其商業ノ模様ヲ知り得可キ簿冊ヲ設ケサル事

第二 自カラ其商業ノ模様ヲ知り過分ノ金高ヲ借入レ或ハ過分  
ノ證券ヲ發出シ或ハ家産ヲ衰頽セシム可キ所爲及ヒ偶生ノ事

ニ管スル所爲ヲ行フタル事

第三 過分ナル一身ノ費用又ハ家内ノ費用ヲ爲タル事

第四 確固タル酬報ヲ得ス他人ノ爲メ過分ノ義務ヲ負フタル事

第五 商法第二十條及ヒ第二十三條ノ規則ヲ遵守セサル事

第六 其金高ノ拂ヲ止メタル後其家屋ノ積書ヲ官署ニ出サハル  
事又ハ其金高ノ拂ヲ止メタル後其商業ヲ繼續シタル事

第七 其金高ノ拂ヲ止メタル後債主中ノ一人ニ其負債ヲ償還シ  
他ノ債主等ノ爲メ害ヲ爲シタル事

第二百九十九條 通常ノ倒産人ハ一月ヨリ少ナカラズ二年ヨリ多カ  
ラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ

第三百條 左ノ者ハ亦前條ニ記スル刑ニ處セラレ可シ

第一 財産ヲ管理スルニ過失アル分産管財人



第二 分散評議ノ投言ヲ名ト爲シ分産人又ハ其他ノ者ト一己ノ利ヲ契約シ又ハ債主全員ニ害ヲ加ヘ己レ一人ニ利ヲ得ヘキ契約ヲ爲シタル債主

第三百一條 前條ニ記シタル第二ノ場合ニ於テ其罪アル債主ノ分散管財人タル時ハ二年ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第三百二條 何人ニ限ラス詐計ヲ用ヒ又ハ人ヲシテ偽リノ起作或ハ偽リノ事柄アルヲ信セシム可キ所爲ヲ行ヒ又ハ無根ノ利益ヲ望マシメ或ハ管テ一旦欺キ取リシ金高ノ償還ヲ望マシム可キ所爲ヲ行ヒ又ハ偽リノ義務アリ或ハ偽リノ義務ノ解除アリシヲ信セシム可キ所爲ヲ行ヒ又ハ偽リノ姓名或ハ偽リノ身分ヲ稱シテ金高、動産、義務ノ證書、義務ノ解除ノ證書及ヒ其他ノ財産ヲ己レニ渡サシメ他人

ノ財産ノ全部又ハ一部ヲ欺キ取リタル者ハ三月ヨリ少ナカラス三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百[ピアストル]ヨリ少ナカラス五千[ピアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

〇第十章 背信ノ罪

第三百三條 幼者ノ窮乏、怯心、情欲ニ乘シ其損害トナル可キ方法ヲ用ヒ其幼者ヲシテ金銀、動産ノ貸借證書ニ姓名ヲ手署セシメ又ハ商業手形或ハ其他ノ手形類讓渡ノ證書ニ姓名ヲ手署セシメタル者ハ其詐計ヲ爲セシ方法ノ如何ヲ問ハス二月ヨリ少ナカラス二年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ其幼者ニ其損害ヲ償還スルノ外其償還高ノ四分一ヨリ多カラス百[ピアストル]ヨリ少ナカラサル罰金ヲ言渡サル可シ〇若シ其犯人幼者ノ監察又ハ後見ヲ任セラレシ者タル時ハ三月ヨリ少ナカラス三年ヨリ多カラサル時間禁錮



ノ刑ニ處セラル可シハ罰金及ヒ償還

第三百四條 人ノ姓名ヲ手署シタル白紙ヲ預リ詐偽ヲ以テ其白紙ニ  
借入ノ證又ハ償還ノ證ヲ記シ又ハ其他其白紙ニ姓名ヲ手署セシ者  
ノ身分又ハ產業ノ爲メ害トナル可キ證ヲ記シタル者ハ六月ヨリ少  
ナカラス三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ五百[ビ  
アストル]ヨリ少ナカラス五千[ビアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言  
渡サル可シ

其犯人人ヨリ右ノ白紙ヲ預リタルニ非ラス之ヲ盜奪シタル時ハ贖  
造人ナリト看做シ其刑ニ處セラル可シ

第三百五條 借受、附託、質入ノ爲メ或ハ雇賃ノ有無ヲ論セス人ニ代テ  
用ヲ達スル爲メ人ヨリ動産、金銀、商品、手形、義務ノ證書、義務解除ノ證  
書ヲ受取り後ニ其所有者或ハ他人ノ爲メ之ヲ示シ或ハ買拂ヒ或ハ

定マリシ用法ニ之ヲ用フ可キニ若シ其約ニ背キテ此等ノ諸件ヲ竊  
取シ又ハ己ノ益ニ用ヒテ其所有者ノ爲メ害ヲ爲シタル者ハ二月ヨ  
リ少ナカラス二年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損  
害償還高ノ四分一ニ當レル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百六條 若シ人ノ使用ヲ受クル者、僕婢、年季ノ弟子、工丁ノ右背信  
ノ罪ヲ犯シ備主ノ爲メ害ヲ爲シタル時ハ一年ヨリ少ナカラサル時  
間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損害ノ償還及ヒ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百七條 訴訟吟味ノ間證書類ヲ裁判所ニ出シタル後之ヲ竊取シ  
タル者ハ其方法ノ如何ヲ問ハス百[ビアストル]ヨリ少ナカラス千五  
百[ビアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

○第十一章 糶賣ノ自由ヲ妨クル罪及ヒ商賣取引ニ於ケル詐偽

ノ罪



第三百八條 動産不動産ノ糶賣ヲ爲シ又ハ起作供給公務ノ入札ヲ爲スニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其糶賣又ハ入札ノ前後ヲ問ハス其自由ヲ妨害シタル者ハ十五日ヨリ少ナカラス二月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百ピアストルヨリ少ナカラス一萬ピアストルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百九條 故意ヲ以テ公ケニ詐偽或ハ讒誣ノ風評ヲ流布シ又ハ賣主ノ期望スル價ヨリ更ニ高價ヲ附ケ又ハ同一ノ商品ヲ所持スル重立チタル者ヲ連合セシメ其商品ヲ賣ルヲ停止セシメ或ハ特ニ定メタル價ヨリ更ニ廉價ニ賣ルヲ妨ケ又ハ其他方法ノ如何ヲ問ハス詐計ヲ用ヒ商品紙幣國貨證券ノ價ヲ貿易ノ自由ニ因リ相競フテ自然ニ定マル可キ價ヨリ更ニ低昂セシメタル者ハ一月ヨリ少ナカラス一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且五百ピアストルヨ

リ少ナカラス一萬ピアストルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ  
第三百十條 若シ肉類麪包薪石炭及ヒ其他必要品ニ付キ前條ニ記スル詐計ヲ行フタル時ハ前條ノ刑ヲ倍スルヲ得ヘシ

第三百十一條 何人ニ限ラス金銀材料ノ性合ニ付キ人ヲ欺キ或ハ偽造ノ寶石ヲ眞物ナリト言ヒ賣渡シ或ハ其他ノ商品ノ性合ニ付キ人ヲ欺キタル者又ハ價造偽造ノ度量ノ具ヲ用ヒ賣渡シタル品物ノ分量ニ付キ買主ヲ欺キタル者ハ一月ヨリ少ナカラス一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損失償還高ノ四分一ヨリ多カラス三十ピアストルヨリ少ナカラス罰金ヲ言渡サル可シ○其價造偽造ノ度量ノ具ハ之ヲ破毀ス可シ

第三百十二條 他人藏板ノ權ニ管スル法律及ヒ規則ニ背キ書籍ヲ刷行シ或ハ刷行セシメ又ハ一人或ハ會社ニ專賣ノ特權ヲ許ルシタル



物品ヲ造リ或ハ造ラシメタル者ハ偽造第七十九條ノノ罪アリトス

第三百十三條 偽造ノ書籍又ハ物品ハ特權アル者ノ爲メ之ヲ沒收シ  
偽造者ハ五百[ピアストル]ヨリ少ナカラス一萬[ピアストル]ヨリ多カ  
ラサル罰金ヲ言渡サル可シ又外國ニテ偽造セシ書籍或ハ物品ヲ埃  
及國內ニ輸入スル者ハ亦五百[ピアストル]ヨリ少ナカラス一萬[ピア  
ストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ  
右偽造ノ書籍又ハ物品ノ偽造タルヲ知テ之ヲ賣リタル者ハ百[ピア  
ストル]ヨリ少ナカラス二千五百[ピアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ  
言渡サル可シ

第三百十四條 又作者或ハ其讓受人ニ屬スル技術ノ物品或ハ歌謠ノ  
書ヲ偽造シ又ハ規則ニ循ヒ製造者ノミニニ屬ス可キ製造記號ヲ偽造

シタル者ハ亦五百[ピアストル]ヨリ少ナカラス一萬[ピアストル]ヨリ  
多カラサシ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百十五條 前條ニ記スル偽造ノ技術物品ヲ賣リ或ハ偽造ノ記號  
ヲ用ヒシ商品ヲ賣リタル者又ハ作者ノ權利ヲ害シテ公ケニ音樂ヲ  
奏シ或ハ演劇ヲ爲サシメタル者ハ百[ピアストル]ヨリ少ナカラス二  
千五百[ピアストル]ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

○第十二章 賭博及ヒ富場ヲ開ク罪

第三百十六條 賭博場ヲ設ケテ衆人ヲ入ラシムル者又ハ其金主ハ一  
月ヨリ少ナカラス六月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且  
ツ百[ピアストル]ヨリ少ナカラス五千[ピアストル]ヨリ多カラサル罰  
金ヲ言渡サル可シ○賭博場ニ在ル財貨及ヒ動産ハ官ニ沒收ス可シ  
第三百十七條 官許ヲ得スシテ富場ヲ設ケタル者ハ一月ヨリ少ナカ



ラヌ六月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百ピアストルヨリ少ナカラス五千ピアストルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

○第十三章 滅盡破壊損害ノ罪

第三百十八條 何人ニ屬ラス他人ニ屬スル農業ノ器具、獸類ノ圍柵、看守人ノ小舎ヲ破壊滅盡シタル者ハ一週ヨリ少ナカラス六月ヨリ多

カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損失ノ償ヲ爲ス可シ

第三百十九條 何人ニ屬ラス已ムテ得サルニ非スシテ他人ニ屬スル馬或ハ其他事ヲ挽カシメ騎行ノ用ニ供シ物ヲ載スル用ニ供ス可キ獸類或ハ他人ニ屬スル其他ノ家畜獸ヲ故ラニ殺シタル者ハ左ノ刑ニ處セラレ可シ

若シ其獸類ヲ蓄ヒ置キシ者ノ所有シ又ハ土地借受人ノ所有スル家屋又ハ繞圍ヲ爲シタル場所又ハ其附屬ノ場所又ハ其土地内ニ於テ右ノ罪ヲ犯シタル時ハ一月ヨリ少ナカラス六月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ

若シ犯人ノ所有シ又ハ借受ケシ場所ニ於テ右ノ罪ヲ犯シタル時ハ一週ヨリ少ナカラス一月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ

若シ總テ其他ノ場所ニ於テ右ノ罪ヲ犯シタル時ハ十五日ヨリ少ナカラヌ一月半ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ

第三百二十條 前條ニ記スル獸類又ハ池沼中ノ魚ヲ毒ヲ以テ殺セシ者ハ三月ヨリ少ナカラス二年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ



第三百二十一條 第三百十八條第三百十九條第三百二十條ニ記シタル總テノ場合ニ於テハ其犯人二十「ピアストル」ヨリ少ナカラス二百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十二條 何人ニ限ラス他人ニ屬スル土地ノ境界ヲ爲ス溝渠ヲ填メ又ハ植籬或ハ編牆或ハ其他ノ塀牆ヲ破毀シタル者ハ一週ヨリ少ナカラス三月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損失償還ノ四分一ニ當レル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十三條 水車製造所池沼ノ所有者或ハ借主其水ノ疏水路ヲ規則ニ定メタルヨリ更ニ他ノ形狀ニ造リ直シ他人ニ屬スル堤防又ハ田野ニ其水ヲ流溢セシメタル時ハ損失償還高ノ四分一ニ當レル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十四條 故ラ堤防ヲ毀テ又ハ其他ノ方法ヲ以テ洪水ヲ起サシメタル者ハ無期ノ徒刑ニ處セララル可シ

第三百二十五條 竈、隙竈、煙突、又ハ其他火ヲ用フル處ノ掃除或ハ修復ヲ怠リ又ハ藁、枯草及ヒ其他ノ燃ヘ易キ物ヲ堆積シタル處ニ接近セシ家屋、建物、森林、葡萄園、田野、園庭内ニ於テ火ヲ燃ヤシ又ハ府内ニ於テ煙火ヲ弄シ又ハ其他懈怠忽ノ所爲ニ因リ火ヲ失ヒシ者ハ三日ヨリ少ナカラス一週ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百「ピアストル」ヨリ少ナカラス二千五百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十六條 何人ニ限ラス故意ヲ以テ他人ニ屬スル家屋、建物、道路、橋梁、堤防、水樋及ヒ其他總テ他人ニ屬スル建築物ヲ毀滅損壞シタル者ハ其方法ノ如何ヲ問ハス三月ヨリ少ナカラス二年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損失償還高ノ四分一ニ當レル罰



金ヲ言渡サル可シ若シ此罪ヲ犯スニ付キ人ヲ殺シ又ハ創傷ヲ被ラシメタル時ハ人ヲ殺スノ罪又ハ人ヲ創傷スル罪ニ相當ナル刑ニ處セラル可シ

第三百二十七條 何人ニ限ラス政府ノ命シ或ハ允許セシ工業ノ成就ヲ故ナシ暴行ニ因リ妨ケタル者ハ一月ヨリ少ナカラス一年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ損失償還高ノ四分一ニ當ル可キ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十八條 何人ニ限ラス官署ノ簿冊證書及ヒ其他ノ書類又ハ爲替手形商業證券又ハ其他之ヲ失フニ因リ他人ノ爲メ損失ヲ生ゼシム可キ書類ヲ故ラニ燒滅シ又ハ破毀シタル者ハ其方法ノ如何ヲ問ハス一年ヨリ少ナカラス三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ且ツ百ピアストルヨリ少ナカラス千五百ピアストルヨリ

多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

第三百二十九條 何人ニ限ラス二人以上相聚リ暴行ヲ爲シテ商品動産、收納物ヲ掠奪破損シタル者ハ有期ノ徒刑ニ處セラレ可シ又其犯人ハ損失ノ償還ヲ言渡サレ且ツ其各人毎ニ百ピアストルヨリ少ナカラス五千ピアストルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ然レモ人ニ煽動セラレ又ハ人ノ乞ニ應シ其群聚中ニ加ハリシ者ハ一年ヨリ少ナカラス三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ

第三百三十條 何人ニ限ラス未タ刈取セサル穀物又ハ天然ニ生シ或ハ人工ヲ以テ植附ケタル樹木又ハ其他ノ植附物ヲ伐リ或ハ荒ラシタル者又ハ他人ニ屬スル葡萄園或ハ園庭ヲ荒ラシ或ハ接木ヲ損害シタル者ハ一週ヨリ少ナカラス十五日<sup>誤</sup>ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラレ可シ



○第四卷 註誤

第三百三十一條 左ノ犯人ハ五<sub>ビ</sub>アストル<sub>ル</sub>ヨリ少ナカラヌ二十五<sub>ビ</sub>

アストル<sub>ル</sub>ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

警察規則ニ定メタル命令ニ従ヒ燈火ヲ點ス可クシテ之ヲ怠リシ

旅舎ノ主人

道路ニ已ムヲ得サルニ非スシテ通行ノ安寧又ハ自由ヲ害スル物

ヲ置キタル者

市街或ハ港路ニ品物ヲ置ク可キノ允許ヲ受ケ又ハ水廻ヲ修復シ

或ハ其他ノ工業ヲ爲スタメ人ノ往來スル場所ニ穴ヲ穿ツ可キ

允許ヲ受ケ通行人ニ注意セシム可キ爲メ又ハ不意ノ災ヲ防ク

爲メ燈火ヲ點ス可キ規則ニ背キタル者

崩壞セントスル建物ヲ修復シ又ハ之ヲ毀ツ可キ警察規則ニ背キ

タル者

道路ニ塵埃又ハ其他ノ障礙物ヲ置キ或ハ健康ヲ害スル蒸發氣ヲ

生ス可キ物ヲ置キタル者

通行人ヲ傷ク可キ性質アル品物ヲ疎忽ニ道路ニ擲キタル者

其他一般ニ邑官ノ權限内ニ於テ設ケタル規則ニ背キタル者

第三百三十二條 左ノ犯人ハ五<sub>ビ</sub>アストル<sub>ル</sub>ヨリ少ナカラヌ二十五<sub>ビ</sub>

アストル<sub>ル</sub>ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サレ且ツ二十四時ヨリ少ナカ

ラス三日ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

火ヲ燒ク火爐、陳窰等ヲ掃除シ又ハ修復スルニ怠リシ者

允許ヲ得スシテ市中又ハ其他人ニ損害ヲ加フ可キ場所ニ於テ煙

火ヲ弄シタル者

府邑ノ内部ニ於テ銃又ハ小銃ヲ發射シタル者



第三百三十三條 左ノ犯人ハ三十ピアストルヨリ少ナカラス百ピアストルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

旅舎ニ泊セシ旅人ノ姓名ヲ簿冊ニ記スルヲ怠リ又ハ定期内ニ右簿冊ヲ掛リ官署ニ差出スヲ怠リシ旅舎ノ主人

人ノ往來スル場所ニ於テ馬ヲ放馳セシメシ者

己レノ監守スル狂癪者又ハ人ノ害ヲ爲シ或ハ猛烈ナル獸類ヲ放

タシメシ者

國ノ貨幣ヲ其定メ通りノ價ニテ受取ルヲ肯セサル者

不意ノ災禍船ノ覆没破船洪水火災ノ場合又ハ盜奪掠奪現行重罪

又ハ衆人ノ聲ヲ發シ盜賊ヲ呼ヒ追場合ニ於テ助力ヲ爲ス可キ

ノ求メテ受ケ之ヲ爲シ得可キニ正當ノ事故ナクシテ之ヲ肯セ

ス又ハ之ヲ怠リシ者

人ノ健康ヲ害シ又ハ腐敗セシ樹葉又ハ其他ノ食物ヲ販賣シタル者

但シ右販賣シタル物品ハ之ヲ滅却シ又ハ海或ハ河ニ投ケ棄ツ

可シ

第三百三十四條 人ニ創傷ヲ加フルヲナシ故意ヲ以テ石又ハ其他ノ

堅キ物又ハ汚穢物ヲ人ニ抛チシ者又ハ人ノ家屋建造物繞圍園庭ニ

抛チシ者又ハ耕作ノ用意ヲ爲シ或ハ種子ヲ蒔キ或ハ穀艸ノ生シタ

ル他人ノ田野ニ入り或ハ通行ノ權ナクシテ此等ノ處ヲ通行シタル

者ハ三十ピアストルヨリ少ナカラス百ピアストルヨリ多カラサル

罰金ヲ言渡サレ且ツ二十四時ヨリ少ナカラス五日ヨリ多カラサル

時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第三百三十五條 又左ノ犯人ハ五十ピアストルヨリ少ナカラス七十



五「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ

故意ヲ以テ他人ノ動産ニ損害ヲ加ヘタル者

狂者又ハ猛烈ナル獸類ヲ放チ或ハ他人ニ屬スル家畜獸ヲ強テ迅

速ニ馳驅シ或ハ過分ノ荷物ヲ負ハシメ或ハ石又ハ其他ノ堅キ

物ヲ抛チ或ハ穴ヲ穿チ疎忽ニ因リ他人ニ屬スル家畜獸ヲ殺シ

又ハ之ヲ傷ケタル者

第三百三十六條 正當ノ原由ナクシテ人民ヲ驚カス可キ害アル噪鬧

ヲ爲ス者又ハ官署ノ命ニテ貼附セシ書ヲ故意ヲ以テ除去シ或ハ破

壞シタル者ハ五十「ピアストル」ヨリ少ナカラズ百「ピアストル」ヨリ多

カラサル罰金ヲ言渡サレ且ツ三日ヨリ少ナカラズ一週ヨリ多カラ

サル禁錮ヲ言渡サル可シ

第三百三十七條 他人ニ屬スル繞圍ヲ爲シ又ハ植附ヲ爲セシ地或ハ

穀艸及ヒ其他土地ヨリ生スル産物ノアル地或ハ葡萄園、園庭内ニ於  
テ己ノ所有スル獸類ノ草ヲ食フヲ知り之ヲ止メサル者ハ亦五十「ピ  
アストル」ヨリ少ナカラズ百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡  
サル可シ

第三百三十八條 前條ニ記スル各地ニ於テ己ノ獸類ニ草ヲ食ハシ

ムル爲メ故テ之ヲ引入レシ者ハ三日ヨリ少ナカラズ八日ヨリ多カ

ラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

第三百三十九條 商店、倉庫、市場ニ於テ價造ノ度量ノ具ヲ用ヒ或ハ法

律上ニ定メタル以外ノ度量ノ具ヲ用ヒタル者ハ五十「ピアストル」ヨ

リ少ナカラズ百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サル可シ○

又右ノ度量ノ具ハ之ヲ沒收ス可シ

第三百四十條 左ノ犯人ハ五十「ピアストル」ヨリ少ナカラズ百「ピアス



トルヨリ多カラサル罰金ヲ言渡サレ且ツ三日ヨリ少ナカラス一週  
 ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ  
 道路街巷散步場又ハ其他公同資益ノ爲メ設ケタル場所ヲ毀損シ  
 又ハ之ヲ侵奪シタル者  
 定リタル事柄ノ讒誣ヲ人ニ歸スルニ非スシテ私ニ人ト喧争シ又  
 ハ人ニ不敬ヲ加ヘシ者

總規則

第三百四十一條 若シ犯罪ノ模様裁判役ノ宥恕ヲ得可キモノタル時

ハ左ノ如ク其刑ヲ輕減ス可シ

若シ其罪ノ死刑ニ當レル時ハ無期ノ徒刑ニ處シ又更ニ輕減シテ有  
 期ノ徒刑ニ處スルヲ得ヘシ

若シ其罪ノ無期ノ徒刑ニ當レル時ハ有期ノ徒刑ニ處シ又更ニ輕減  
 シテ有期ノ繫獄ノ刑ニ處スルヲ得ヘシ

若シ其罪有期ノ徒刑又ハ無期ノ繫獄ノ刑ニ當レル時ハ有期ノ繫獄  
 ノ刑ニ處シ又更ニ輕減シテ二年ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ  
 處スルヲ得ヘシ

若シ其罪無期ノ追放ノ刑ニ當レル時ハ有期ノ追放ノ刑ニ處シ又更  
 ニ輕減シテ一年ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ處スルヲ得ヘシ



若シ其罪有期ノ追放ノ刑有期ノ禁獄ノ刑無期ノ官位職務剝奪ノ刑民權剝奪ノ刑ニ當レル時ハ六月ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ處ス可シ

若シ其罪ノ輕罪ナル時ハ法律上ニ定メシ其罪ニ當レル最輕ノ刑ヨリ更ニ重キ刑ヲ言渡ス可カラヌ又禁錮ノ刑期ヲ其最輕ノ刑期ヨリ更ニ減シ或ハ唯罰金ノミヲ言渡スヲ得ヘシ但シ之レカ爲メ其刑ヲ註誤ノ刑ヨリ更ニ輕カラシム可カラヌ

若シ其罪ノ註誤ナル時ハ其刑法律上ニ定メシ其罪ニ當レル最輕ノ刑ヨリ更ニ重キヲナカル可ク又之ヲ輕減シテ五「ピアストル」ヨリ少ナカラサル罰金ヲ言渡スヲ得ヘシ

埃及法 刑法草案終

埃及法 治罪法草案

○第一卷 預先ノ治罪

○第一章 總規則

第一條 重罪輕罪註誤ニ付キ法律上ニ定ムル刑罰ハ管轄裁判官ノ言渡アルニ非サレハ之ヲ適用ス可カラヌ

第二條 犯人ヲ刑ニ處セント求ムル刑事ノ訴ハ檢察官ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラヌ アシストリニクシヨシ アシシチンビユアツク ミニステールレビユアリツク

第三條 輕重罪ノ下吟味又ハ註誤罪ノ下吟味ハ檢察官又ハ民事原告人ヨリ之ヲ求ムルヲ得ヘシ但シ控訴裁判所ヨリ其公務ヲ以テ下吟味ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡ス場合又ハ現行ノ罪犯アリテ下吟味掛リ

裁判役自カラ其公務ヲ以テ下吟味ヲ爲ス可キ場合ハ格別ナリトス

第四條 下吟味ハ現行罪犯ノ場合ヲ除クノ外下吟味掛リ裁判役自カ



ラ之ヲ爲シ又ハ其裁判役ヨリ委任ヲ受ケシ者之ヲ爲ス可ク且檢察  
又ハ民事原告人ヨリノ求メニ循ヒ之ヲ爲ス可シ

第五條 下吟味ト犯罪告訴トノ基本タル可キ司法警察ハ司法警察官  
吏又ハ其指揮ヲ受クル下役之ヲ行フ可シ

第六條 左ニ記列スル官吏ハ各其職ヲ行フ管轄地内ニ於テ司法警察  
ノ官吏タリ

檢察官

鎮台

「ムウザル」地方官  
ノ名

警察總長

一地區ノ警察長

警察局長

警察屯營所ノ諸官吏

「セイウ、エルベレット」地方官ノ名ニシ  
テ邑長ノ如キ者

其他特ニ政府ヨリ任スル諸官吏

○第二章 司法警察

第七條 凡ソ官吏又ハ其委任ヲ受クル者其職務ヲ行フニ方リ重罪輕  
罪註誤ヲ犯セシ者アルヲ知リタル時ハ其犯罪ノ地ヲ管轄スル裁判  
所ノ檢察官又ハ其犯人タルヲ思料ス可キ者所在ノ地ヲ管轄スル裁  
判所ノ檢察官ニ早速其旨ヲ報告ス可シ

第八條 何人ニ限ラズ公ケノ安寧又ハ人命ヲ害スル重罪ヲ目撃シタ  
ル者ハ檢察官ニ之ヲ報告ス可シ

五〇八 又現行罪犯ノ場合又ハ現行罪犯ト同シキ景況ノ場合ニ於テ預防ノ  
爲メ犯人ヲ逮捕シ得ヘキ時ハ之ヲ捕ヘテ檢察官ノ長ニ引渡シ又ハ



公ケノ兵力ヲ預カル者ニ引渡ス可シ但シ之カ爲メ特ニ逮捕ノ命令書ヲ得ルヲ要セス

第九條 司法警察官吏ハ其管轄地内ニ於テ行フタル重罪輕罪註誤罪犯申立ヲ受ケ其裁判ヲ求ムル爲メ裁判所ノ檢察官ニ其申立書ヲ出ス可シ

第十條 司法警察官吏及ヒ其下役ハ其申立ヲ受ケシ諸罪犯又ハ其他ノ方法ニテ知得シタル諸罪犯ノ下吟味ヲ容易ナラシム可キ總テノ模様ヲ探索シ並ニ總テノ證據ヲ取調ヘ且其證據ヲ分明ナラシムル爲メ保全ノ處置ヲ爲シ此等ノ諸事ヲ調書ニ記入シテ諸證書類ト共ニ之ヲ檢察官ニ出ス可シ

第十一條 檢察官ノ外ノ司法警察官吏ハ下吟味掛リ裁判役ヨリノ委任ニ因リ下吟味ニ取掛ルコトヲ得ヘシ但シ其委任ヲ受ケシ權限外ノ

事ハ之ヲ爲ス可カラズ

第十二條 然レモ現行罪犯ノ場合ニ於テハ檢察官及ヒ其他ノ司法警察官吏直チニ最初ノ下吟味ニ取掛ルコトヲ得ヘシ

第十三條 現ニ行フ所ノ罪犯又ハ即今行ヒ終リタル罪犯ヲ現行ノ罪犯ト云ヒ又衆人ニ罪犯ヲ高聲ニ呼ビ追ハレ或ハ被告人犯罪ノ時ヨリ間モナク兵器器具物件書類ヲ携ヘタルニ因リ之ヲ其罪犯ノ主又ハ從ナリト思料ス可キ時ハ亦現行ノ罪犯ト云フ

第十四條 現行罪犯ノ場合ニ於テハ司法警察官吏早速其場所ニ至リ必要ナル調書ヲ記シ且犯罪ノアリシコト其模様ト場所ノ景狀トヲ記シ其場所ニ居合ハセシ者ノ申立ヲ聽キ又ハ其罪犯ノ事實ト其本人トニ付キ告知ヲ爲ス可キ者ノ申立ヲ聽ク可シ

第十五條 司法警察官吏ハ其場所ニ居合ハセシ者ニ其調書ヲ記シ終



ル時ニ至ル迄其場ヲ去ルヲ禁シ且罪犯ノ事實ニ付キ告知ヲ爲ス可  
キ者ヲ即刻呼出スヲ得ヘシ

第十六條 前條ニ記スル制禁ヲ犯ス者アリ又ハ呼出ヲ受ケ出席スル  
ヲ肯セサル者アル時ハ司法警察官吏此等ノ旨ヲ調書ニ記ス可シ

第十七條 前條ニ記スル犯人ハ裁判所ニ於テ右調書ヲ證ト爲シ二十  
「ピアストル」ヨリ少ナカラス百「ピアストル」ヨリ多カラサル罰金ヲ言  
渡サレ且二十四時ヨリ少ナカラス一週ヨリ多カラサル時間禁錮ノ  
刑ニ處セラレ可シ

第十八條 現行罪犯ノ場合ニ於テ重罪又ハ竊盜、詭騙、暴行等ノ罪ヲ犯  
シ或ハ犯サント試ミ爲シタルヲ思料ス可キ時又ハ犯罪被告人埃及  
ニ於テ人ノ知リタル定マリシ住所アラサル時ハ司法警察官吏其犯  
罪ノ重キ懲憑アル被告人ヲ捕ヘシメ其辨解ヲ聽キタル上二十四時

内ニ之ヲ管轄裁判所ニ送り其檢事局ニ引渡ス可シ但シ檢察官ハ二  
十四時内ニ下吟味掛リ裁判役ヲシテ之ヲ問糺セシム可シ

第十九條 司法警察官吏ハ前條ノ場合ニ於テ被告人其場ニ在ラサレ  
ハ引出狀ヲ出シテ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第二十條 引出狀ハ使吏又ハ公ケノ兵力ヲ預カル者ニ之ヲ渡ス可シ  
第二十一條 現行罪犯ノ場合ニ於テハ司法警察官吏司法職制法ニ定  
ムル規則ニ循ヒ被告人ノ住所ヲ穿鑿シ兵器器具及ヒ其他何品ニ限  
ラス罪犯ヲ行フニ用立ツ可キ物件或ハ事實ヲ分明ナラシム可キ物  
件アラハ之ヲ取上ク可シ

第二十二條 又被告人ノ住所ニ於テ見出シタル書物モ亦前條ニ記ス  
ル所ト同シク之ヲ取上ク可シ

第二十三條 取上ケタル物件ハ之ヲ蓋ヒ又ハ封印ヲ爲シテ之ヲ束テ



其封印ノ下ニ在ル一片ノ紙ニ其取上ケノ調書ノ日附ト其取上ケヲ爲ス事柄ノ日附トヲ記ス可シ

第二十四條 司法警察官吏ハ鑒定人又ハ醫師ノ助ケヲ得テ各其職業ニ當スル事柄ニ付キ申立書ヲ出ス可キ旨ヲ要ム可シ但シ其鑒定人又ハ醫師ハ本心ニ背カス其説ヲ申立ツ可キノ誓ヲ爲ス可シ

第二十五條 檢察官現行罪犯ノ場合ニ於テ司法警察官吏ノ既ニ取掛リシ下吟味ニ關涉スル時ハ司法警察官吏ニ代テ其下吟味ヲ爲シ又ハ其官吏ニ繼續シテ之ヲ爲ス可キヲ許ス可シ

第二十六條 又檢察官自カラ其下吟味ヲ爲ス時ハ司法警察官吏ニ其手續ノ一部ヲ爲ス可キヲ任スルヲ得ヘシ

第二十七條 如何ナル場合ニ於テモ司法警察官吏現行罪犯ノ下吟味ヲ爲スタメ其場所ニ至ル時ハ檢察官ニ其旨ヲ報告ス可シ

第二十八條 檢察官ハ早速其旨ヲ下吟味掛リ裁判役ニ報告ス可シ

第二十九條 司法警察官吏並ニ現行罪犯ノ場合ニ於テ處置ヲ爲ス檢察官ハ下吟味掛リ裁判役ノ來ルヤ否其下吟味ノ手續ヲ其裁判役ニ任カス可シ但シ下吟味掛リ裁判役ハ檢察官ヲ除クノ外其他ノ司法警察官吏ニ既ニ其取掛リシ訴訟手續ヲ繼續シテ取行フヲ許ルシ又ハ特ニ下吟味ノ手續中其箇條ヲ定メテ之ヲ任カスヲ得ヘシ

第三十條 司法警察官吏現行ノ犯人ヲ取押ヘ又ハ他ノ官吏ノ名代トナリテ犯人ヲ取押フル時ハ直チニ公ケノ兵力ヲ借ラント求ムルヲ得ヘシ

〇第三章 下吟味ヲ求ムル事及ヒ刑事ノ訴訟

第三十一條 現行罪犯ノ場合ニ於ケル下吟味ノ調書ハ司法警察官吏遲滯ナク之ヲ其管轄裁判所ノ檢事局ニ出シ檢察官ハ直チニ其調書



取調ヘタル上總テノ書類ヲ下吟味ヲ求ムル書ト共ニ下吟味掛リ裁  
判役ニ出ス可シ

第三十二條 又司法警察官更ハ其受取リタル犯罪ノ申立書及ヒ諸罪  
犯ヲ證シ或ハ之ヲ取調ヘタル調書ヲ遲滞ナク檢事局ニ出ス可シ

第三十三條 又檢察官ハ前條ニ記シタル犯罪ノ申立書及ヒ調書ヲ受  
取リタル上又ハ其他ノ方法ニテ犯罪ヲ知リタル上ニテ下吟味掛リ  
裁判役ニ此等ノ書類ヲ出シ且下吟味ヲ求ムル書ヲ出ス可シ

第三十四條 檢察官ハ輕罪又ハ註誤ノ事ニ付キ犯罪被告人ノ拘留セ  
ラレサル時ハ直ニニ管轄ノ裁判所ニ訴ヘ被告人ヲ其裁判所ニ呼出  
スヲ得ヘシ

第三十五條 檢察官ハ其別段取調ノ手續ヲ爲スニ及ハスト思フ犯罪  
申立書及ヒ犯罪ヲ證スル調書ノ目錄ヲ毎週檢事長ノ手ヲ經テ控訴

裁判所ニ出ス可シ

第三十六條 控訴裁判所ニ於テハ此等ノ犯罪申立書及ヒ犯罪ヲ證ス  
ル調書ノ目錄ヲ見タル上又ハ其他ノ方法ヲ以テ犯罪ヲ知リタル上  
諸書類ノ寫ヲ出サシメ又ハ犯罪ノ下吟味ヲ爲ス可キヲ其公務ヲ  
以テ言渡スヲ得ヘシ但シ其下吟味ハ檢事長又ハ其代役ノ求メニ  
因リ相當ノ下吟味掛リ裁判役遲滞ナク之ヲ爲ス可シ○檢事長ハ控  
訴裁判所ノ命ニ應シ下吟味ノ模様ヲ申立ツ可シ

○第四章 犯罪告訴及ヒ民事原告ノ事

第三十七條 民事原告人ニ非サル者ヨリノ犯罪告訴狀ハ之ヲ通常ノ  
犯罪申立書ナリト看做ス可シ

第三十八條 民事原告人タルヲ自カラ述ヘシ者ヨリノ犯罪告訴狀ハ  
裁判所ノ書記局又ハ下吟味掛リ裁判役ノ書記局又ハ檢事局ニ之ヲ



出シ或ハ直チニ下吟味掛リ裁判役ニ出ス可シ

第三十九條 下吟味掛リ裁判役檢察官ノ手ヲ經テ右犯罪告訴狀ヲ受取ラサル時ハ遲滯ナシ之ヲ檢察官ニ示ス可シ

第四十條 下吟味掛リ裁判役ハ右告訴狀ヲ檢察官ニ示セシ後其告訴ヲ管理シテ下吟味ニ取掛ル可シ但シ檢事局ヨリ別段下吟味ヲ求メサル時ト雖モ亦同一ナリトス

第四十一條 輕罪及ヒ註誤ノ場合ニ於テハ民事原告人直チニ被告人ヲ管轄裁判所ニ呼出シ其裁判席ヲ開クヨリ三日前ニ諸書ヲ檢事局ニ出ス可シ

第四十二條 民事原告人ハ裁判所々在ノ地ニ住セサル時ハ特ニ其地ニ住所ヲ擇ミ定ム可シ若シ然ラサレハ諸書類ヲ出ス可キ者之ヲ民事原告人ニ宛テ裁判所ノ書記局ニ出ス可シ

○第五章 下吟味ノ事及ヒ下吟味掛リ裁判役ノ事

第四十三條 下吟味掛リ裁判役ハ現行罪犯ノ場合ニ於テ司法警察官吏ノ行フ可キ諸件ヲ自己ノ公務ヲ以テ執行フヲ得可シ

第四十四條 下吟味掛リ裁判役ハ前條ノ場合ニ於テ其下吟味ニ取掛リ又ハ犯罪ノ地ニ至リシ時其旨ヲ檢事局ノ長ニ報告ス可シ且ツ檢察官ノ立會アル時ハ其求メニ應シテ下吟味ヲ爲ス可シ

第四十五條 又下吟味掛リ裁判役ハ檢察官又ハ司法警察官吏ノ既ニ下吟味ニ取掛リタル時其完全ナリト思ハサル處置ヲ更ニ改メ爲スヲ得ヘシ

第四十六條 現行罪犯ノ場合ノ外ハ下吟味掛リ裁判役其公務ヲ以テ下吟味ニ取掛ル可カラズ

第四十七條 然レモ下吟味掛リ裁判役法ニ適シテ一旦下吟味ヲ爲シ



始メタル時ハ繼續シテ之ヲ行ヒ如何ナル求メテ爲ス者アリト自カ  
ラ適當ナリト思フ如ク之ヲ爲シ終ル可シ

第四十八條 檢察官及ヒ裁判所ハ何時ニ限ラス下吟味ノ模様ノ報告  
ヲ得ント要ムルノ權アリ

第四十九條 民事原告人及ヒ被告人ハ下吟味掛リ裁判役ノ既ニ下吟  
味ヲ爲シ終リシテ思度スル時ニ非サレハ下吟味ノ模様ノ報告ヲ得  
ント要ムルノ權ナク唯下吟味掛リ裁判役ニ其下吟味ヲ成就ス可キ  
ヲ求ムルヲ得ヘキノミトス

第五十條 被告人ハ其問糺ニ答フル前ニ下吟味掛リ裁判役ノ管轄異  
ナル旨ヲ述ヘ又ハ法律上ニ其訴告セラレシ事ヲ罪犯ト爲サ、ル旨  
ヲ述ヘ其問糺ヲ受クルヲ拒ムヲ得ヘシ

第五十一條 下吟味掛リ裁判役ハ檢察官ノ申立書ヲ受取り且民事原

告人ヲ問糺セシ上ニテ二十四時内ニ前條ニ記スル附帶ノ訴ヲ裁判  
ス可シ

第五十二條 原告及ヒ被告人ハ前條ノ言渡ニ付キ故障ヲ申立ツル  
ヲ得可シ且其故障ヲ申立テシ時ハ問糺ヲ中止ス可シト雖モ之カ爲  
メ下吟味ヲ中止ス可カラズ

第五十三條 檢察官ト犯罪被告人トハ官費又民事原告人ハ自費ニテ  
總テノ証人問糺ヲ求メ又ハ其他下吟味ノ手續ヲ求ムルヲ得ヘシ  
第五十四條 前條ニ記セシ求メハ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上ニテ之  
ニ答ヘ且然ル時ハ亦相手方ノ申立ヲモ聽ク可シ但シ其言渡ニ服セ  
サル者ハ裁判所ニ故障ヲ申立ツルヲ得ヘシ

○第六章 證據ノ事

第五十五條 下吟味掛リ裁判役ハ其手續ヲ爲ス間何時ニテモ書記官



ノ立會ヲ得可ク書記官ハ下吟味掛リ裁判役ト共ニ調書ニ姓名ヲ手  
署シ且言渡書及ヒ証書類ヲ貯ヘ置ク可シ

○第一款 證物ノ事

第五十六條 下吟味掛リ裁判役ハ犯罪ノ爲メ害ヲ被リシ物又ハ人ノ  
模様ヲ証シ且犯人ヲ覓出シ並ニ犯罪ヲ鑿定スルニ益アル總テノ証  
據ヲ集ム可シ

第五十七條 若シ右ノ証ヲ得ルニ付キ醫師又ハ藝術家ノ助ケヲ要ス  
ル時ハ下吟味掛リ裁判役其爲ス所ノ事ニ立會ヒ之ヲ監督ス可シ

第五十八條 若シ又預メ爲ス可キ業ノ必要ナルニ因リ或ハ數回試験  
ヲ爲スノ必要ナルニ因リ又ハ其他ノ原由ニ因リ下吟味掛リ裁判役  
ノ居合ハセサル所ニ於テ証ヲ立テシム可キ時ハ其裁判役眞認ノ種  
類ト証ス可キ箇條トヲ定ムル言渡ヲ爲ス可シ但シ其言渡書ニハ其

趣意ヲ記入ス可シ

第五十九條 醫師及ヒ藝術家ハ下吟味掛リ裁判役ニ向ヒ其本心ニ從  
ヒ詐僞ナク其說ヲ述フ可キノ誓ヲ爲シ且其姓名ヲ手署セシ申立書  
ヲ記ス可シ但シ其中立書ハ下吟味ノ書類中ニ加ヘ相當ノ證ト爲ス  
可シ

第六十條 下吟味掛リ裁判役ハ犯罪ニ管シタル物件及ヒ書類ノ眞物  
ニ相違ナキコトヲ證明ス可シ

又右裁判役ハ己ノ所屬裁判所ノ管轄内ト雖モ其裁判所々在ノ府  
外ニ於テ右等ノ證ヲ立テシム可キ時ハ司法警察官吏ニ前ニ記スル  
自己ノ職務ヲ任スルコトヲ得ヘシ又己ノ所屬裁判所ノ管轄外ニ於  
テ右等ノ證ヲ立テシム可キ時ハ其地ノ裁判所ノ下吟味掛リ裁判役  
ニ右ノ職務ヲ任スルコトヲ得ヘシ又其委任ヲ受ケン下吟味掛リ裁判



役ハ更ニ其職務ヲ司法警察官吏ニ任スルヲ得ヘシ但シ此等ノ場  
合ニ於テ第七十五條ノ規則ヲ用フルノ差支ナカラシム可シ

第六十一條 贗造ノ事ニ於ケル照徴書類ノ眞物ニ相違ナキ旨ヲ證シ  
且ツ之ヲ認ムルコト付キ訴訟法ニ定メタル規則ハ治罪法ニモ亦之ヲ  
適用ス可シ

〇第二款 證人ノ事

第六十二條 下吟味掛リ裁判役ハ現ニ犯罪ノ在ルヲ及ヒ其模様ト被  
告人ノ有罪或ハ無罪トヲ證ス可キ事柄ニ付キ總テノ證人ヲ問糺ス  
ヲ得ヘシ

第六十三條 然レモ右裁判役ハ裁判所ニ於テ證ヲ申立ツルノ權ナキ  
者及ヒ訴訟法ノ規則ニ循ヒ其證ノ申立ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可  
キ血族及ヒ縁族ノ親ノ申立ヲ心得ノ爲メ聽取ル可シ

第六十四條 證人ハ使吏ヲシテ之ヲ呼出サシム可シ但シ此規則ト下  
吟味掛リ裁判役自己ノ意ニ任カセ出席シタル證人ヲ問糺ス可キ規  
則ト相觸ル、コトナカル可シ

第六十五條 下吟味掛リ裁判役ハ檢察官ノ求メニ因リ呼出シタル各  
證人ヲ問糺ス可シ

第六十六條 下吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ指示シタル各證人ヲ呼出  
サシメ且民事原告人ノ呼出ス可キ各證人ヲ其特定セシ日期ニ問糺  
ス可シ

第六十七條 然レモ前條ノ場合ニ於テハ下吟味掛リ裁判役其問フ可  
キ箇條ノ大畧ヲ定メシ上ニテ直チニ其裁判所ヘノ申立ニ取掛ル可  
キ旨ヲ言渡スヲ得ヘシ但シ此場合ニ於テハ本人其言渡書ノ送達  
ヲ得タルヨリ二十四時内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得ヘシ



第六十八條 呼出ヲ受ケタル證人若シ其呼出ニ循ハサル時ハ下吟味掛リ裁判役檢察官ノ申立ヲ聽キタル上ニテ初犯ニ於テハ百ビアストルノ罰金ヲ言渡シ且其者ノ費用ニテ更ニ之ヲ呼出ス可シ

第六十九條 再犯ニ於テハ引出狀ヲ出ス可シ

第七十條 證人ニ罰金ヲ言渡ス其言渡ニ付テノ故障申立ハ初メテ其出席スル時ニ至ル迄之ヲ許ルシ又然ノミナラス引出狀ヲ出シタル時ノ後ト雖モ亦之ヲ許ルス可シ然レモ其者ニ人違ニ非サルヤ否ノ問ヲ除クノ外其他ノ問ニ答ヘタル後ハ之ヲ許ルサス○其故障申立ハ下吟味掛リ裁判役之ヲ裁判ス可ク其裁判役ハ證人辨解ノ事由ヲ鑒定ス可シ

第七十一條 第六十八條ニ記スル言渡ニ付キ故障申立ヲ爲サ、ル時又ハ故障申立ヲ爲スト雖モ其裁判ヲ言渡シタル時ハ證人等此等ノ

言渡ニ付キ故障ヲ申立ツ可カラス

七十二條 若シ證人病ニ罹リ又ハ差支アル時ハ下吟味掛リ裁判役其證人ノ住所ニ至リ其申立ヲ聽ク可シ

第七十三條 若シ證人裁判所ノ管轄地外ニ住スル時ハ下吟味掛リ裁判役其證人住所ノ地ヲ管轄スル裁判所ノ下吟味掛リ裁判役ニ其權ヲ委任ス可シ

第七十四條 又證人裁判所ノ管轄地内ニ住スルト雖モ其住所ト裁判所々在ノ地ト遠ク隔タリタル時ハ司法警察官吏ニ證人ノ申立聽取ノヲ委任スルヲ得ヘシ但シ此事ハ臨時特別ノ場合ノミニ限ル可シ

第七十五條 總テ下吟味掛リ裁判役下吟味ノ手續ヲ爲スタメ又ハ證人ノ申立ヲ聽取ル爲メ其權ヲ他人ニ委任スル時ハ其爲ス可キ所業



ト其問フ可キ箇條トテ詳細ニ定ム可シ

第七十六條 若シ下吟味掛リ裁判役他人ニ其權ヲ委任スル前ニ原告及ヒ被告ニ其要ム可シト思ヘル證ヲ立ツ可キト己レノ定メシ問トニ付キ其意ヲ問糺スヲナキ時ハ右裁判役申立書ヲ差出ス前ニ證人問糺ノ調書ヲ右ノ原被告ニ示シ其願ニ因リ其要ムル所ノ證ヲ立テ且證人ヲ問糺スヲ他人ニ委任ス可シ

第七十七條 如何ナル場合ニ於テモ證人ハ被告人ノ在ラサル所ニ於テ民事原告人ト相對セシム可カラス又民事原告人ハ被告人ノ在ラサル所ニ於テ證人ト相對セシム可カラス

第七十八條 然レモ被告人ヨリ特ニ求ムル時ハ證人ヲシテ被告人ト相對セシム可シ○但シ此事ヲ爲スニ付テハ證人ノ以前申立テタル證ヲ驗眞シ且證人ヲシテ其申立テシ所ニ相違ナキヤテ更ニ誓ハシ

ム可シ

第七十九條 檢察官ハ證人ヲシテ被告人又ハ民事原告人ト相對セシムル場合ニ非サレハ證人ノ證ヲ申述フル席ニ立會フ可カラス

第八十條 證人ハ互ニ之ヲ相對セシムルヲ得ヘシ

○第七章 犯罪被告人ニ對スル預防ノ處置

第八十一條 若シ犯罪被告人其呼出ニ循ヒ出席セサル時又ハ其訴ヘラレシ犯罪ノ種類第十八條ニ記スル如クタル時ハ下吟味掛リ裁判役其被告人ニ對シ引出狀ヲ出スヲ得ヘシ

第八十二條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ問糺シタル上犯罪ヲ思料ス可キ徵憑十分ナルノ摸樣アル時ハ下吟味掛リ裁判役即刻又ハ其後ニ逮捕狀ヲ出シ或ハ引出狀ヲ變シテ逮捕狀ト爲スヲ得ヘシ

第八十三條 引出狀ニハ左件ヲ記ス可シ



第一 被告人ノ姓名、職業、住所

第二 罪ヲ訴ヘラレシ其事柄

第三 引出狀ヲ所持スル各使吏又ハ兵力ヲ預タル者ニ其被告人

ヲ捕ヘ之ヲ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ引出ス可キノ命令

此引出狀ハ下吟味掛リ裁判役其日附ヲ記シ且姓名ヲ手署ス可

シ

第八十四條 被告人ヲ捕ヘシ其地ノ遠隔ナルニ因リ又ハ之ヲ捕ヘシ

時刻ノ遅キニ因リ其被告人ヲ直チニ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ引

出スヲ能ハサル時ハ假リニ拘留場中ノ一室ニ入レ置ク可シ但シ既

ニ刑ヲ言渡サレシ者又ハ逮捕狀ニ因リ捕ヘラレシ者ト雜居セシム

可カラス

第八十五條 若シ引出狀ヲ受ケシ被告人下吟味ヲ爲ス裁判所ノ管轄

地ニ於テ捕ヘラレタルニ於テハ其被告人其地ヲ管轄スル裁判所ノ

下吟味掛リ裁判役ノ問糺ヲ受ケント求ムルヲ得ヘシ但シ此場合

ニ於テ其被告人ハ其裁判役ノ諸證書類及ヒ心得書等ヲ受取ルニ至

ル迄假リノ拘留ヲ受ケシ儘ニテ待タサルヲ得ス

第八十六條 其召捕ノ地ヲ管轄スル裁判所ノ下吟味掛リ裁判役ハ問

糺ノ上引出狀ヲ變シテ逮捕狀ト爲スヲ得ヘシ但シ當然下吟味ヲ

爲ス可キ裁判役ハ證書類ヲ取調ヘタル上其被告人ヲ自己ノ管轄地

内ノ拘留場ニ移ス可キヲ言渡スヲ得ヘシ

第八十七條 逮捕狀ハ檢察官ノ説ヲ聽キタル上ニ非サレハ之ヲ出ス

可カラス但シ檢察官ハ下吟味ノ書類ヲ見タル上ニテ其説ヲ申立ツ

可シ

第八十八條 逮捕狀ハ引出狀ト同シキ諸件ヲ記ス可シ又逮捕狀ヲ出



セシ時ハ拘留場ノ長ニ被告人ヲ受取り之ヲ拘留ス可キノ命ヲ下ス可シ

第八十九條 逮捕狀ハ拘留人ノ姓名簿中ニ之ヲ記ス可シ

第九十條 逮捕狀又ハ引出狀ハ其正本ヲ被告人ニ示シ且其寫ヲ被告人ニ渡シタル上ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ

其正本ニハ其寫ヲ被告人ニ渡シタルヲ又ハ被告人ノ之ヲ受取ルヲ肯セサルヲ記ス可シ

第九十一條 引出狀及ヒ逮捕狀ハ其日附ヨリ六月ノ後ニ至テハ下吟味掛リ裁判役又ハ檢察官長ノ更ニ檢印セシ上ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラズ但シ右等ノ官吏ハ其檢印ヲ爲シタル所ニ日附ヲ記ス可シ

第九十二條 下吟味掛リ裁判役ハ唯四十八時間ノミ被告人ヲ拘留ス

ルヲ得ヘシ若シ此時間ニ於テ必要ナリト思フ時ハ裁判所ニ其拘留ノ期限ヲ更ニ六日間延ハス可キ旨ヲ求ムルヲ得ヘシ但シ其期限ハ六日以上之ヲ延ハス可カラズ

第九十三條 下吟味掛リ裁判役ハ被告人其第六級ニ至ル迄ノ家族ト

立會人ノ面前ニ於テ應接ス可キヲ言渡スヲ得ヘシ但シ其立會人

ハ被告人ノ訴ヘラレシ犯罪ノ事ニ付キ其被告人ノ他人ト辭ヲ通ス

ルヲ制スルノ權アリ

第九十四條 被告人ハ拘留中ト雖モ立會人ナク其代言人ト應接スル

ヲ得ヘシ但シ之レカ爲メニハ其代言人控訴院所屬ノ代言人タル

ヲ必要トス

八二九 第九十五條 下吟味掛リ裁判役ハ何時ニテモ己レノ出セシ逮捕狀又ハ引出狀ヲ免除スルヲ得ヘシ



此言渡ハ故障ヲ申立ツルヲ許サス

第九十六條 被告人ハ何時ニテモ假リノ釋放ヲ得ント求ムルヲ得可シ但シ其求メハ裁判役ノ會議室ニ之ヲ爲シ其會議室ニテハ檢察官ノ申立書ヲ見タル上ニテ其面前ニ於テ其求メノ旨ヲ裁定ス可シ  
第九十七條 此裁判ハ控訴ノ法ヲ以テ之ヲ取消サント訴フ可カラス  
第九十八條 被告人假リニ釋放ヲ得ントスル求メハ其棄却セラレシ時更ニ之ヲ爲ス可カラス但シ此規則ハ下吟味掛リ裁判役自己ノ職務ニ因リ又ハ檢察官ノ求メニ因リ被告人ヲ假リニ釋放ス可キ權ト相觸ル、コナカル可シ

第九十九條 民事原告人ハ被告人ノ逮捕ヲ求ム可カラス又其被告人ヲ釋放スルニ管シタル論辨ノ時其說ヲ聽クニ及ハス

第一百條 輕罪ノ被告人其住所アル時又ハ管テ一ケ年以上禁錮ノ刑ヲ

言渡サレシコトナキ時ハ其間糺ヲ受ケタルヨリ八日ノ後ニ至リ當然保證人ヲ立テス假リノ釋放ヲ受クルコトヲ得ヘシ

第一百一條 下吟味掛リ裁判役又ハ此裁判役ノ言渡ヲ取消サント爲ス願ヲ裁判スル裁判所ハ右保證高ヲ定ム可シ但シ其保證高ハ左ノ順序ニ於テ左件ヲ拂フニ充テ用フ可シ

第一 官ノ費用

第二 民事原告人ノ差出シタル費用

第三 罰金

又右保證高ハ前ニ記スル諸件ヲ償フ可キ高ノ外別段ノ言渡ヲ以テ定ム可キ金高ヲ包含ス可ク且其金高ハ左ノ順序ヲ以テ左件ニ充テ用フ可シ

第一 罰金ト是レ迄出セシ費用高トノ外裁判言渡ヲ執行シ費用



第二 被告人出席セサルニ付テノ過代

第二百二條 又重罪ニ付テハ被告人當然假リ人釋放ヲ受ク可カラス然レモ裁判所ヨリ保證高ノ有無ヲ問ハス前ニ記シタル法方ヲ以テ假リノ釋放ヲ言渡スヲ得ヘシ

第二百三條 下吟味掛リ裁判役ノ職務ヲ爲シ終リタル後被告人假リノ釋放ヲ得ント訴フ可キ時ハ各其犯罪訴訟ヲ管轄ス可キ初告裁判所又ハ控訴裁判所ニ其釋放ヲ訴ヘ此等ノ裁判所ハ裁判役ノ會議室ニ於テ其附帶ノ訴ヲ裁判ス可シ但シ其裁判ハ更ニ之ヲ取消サント訴フ可カラス

第二百四條 如何ナル場合ニ於テモ犯罪ノ模様更ニ重劇ナルヲ覺ユル時ハ警テ引出狀又ハ逮捕狀ヲ免除シ或ハ別段ノ言渡アリテ被告人假リニ釋放ヲ受ケシニ管セス其逮捕ヲ言渡スヲ得ヘシ然レモ下

吟味掛リ裁判役其職務ヲ行ヒ終リシ後ニ於テハ其裁判役犯罪ノ訴訟ヲ裁判ス可キ裁判所ノ名前ヲ以テ其裁判所ノ長及ヒ其書記官ヲシテ逮捕狀ニ檢印ヲ爲サシメシ上ニ非サレハ其逮捕狀ヲ實際ニ執行ス可カラス但シ其裁判所長及ヒ書記官ハ逮捕ヲ許ルズ言渡ヲ其檢印ノ傍ニ附記ス可シ

逮捕ヲ許ルズ言渡ハ檢察官ノ申立書ヲ見且其說ヲ聽キタル上ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラス

第二百五條 如何ナル場合ニ於テモ假リニ釋放ヲ得タル被告人ヲ裁判所ノ裁判役會議室ノ言渡ニ因リ更ニ逮捕シ且重罪ノ訴ヲ受ケシ儘ニテ之ヲ重罪裁判所ニ送ルヲ得ヘシ

第二百六條 下吟味掛リ裁判役ハ其任セラレシ諸件ト下吟味ヲ遅延セシメシ原因トナ一週間一度ツ、裁判役ノ會議室ニ申立ツ可シ



○第八章 下吟味ノ終ル事及ヒ被告人ヲ相當ノ裁判所ニ移ス事

第七條 下吟味掛リ裁判役ハ下吟味ノ終ル前ニ民事原告人ト被告人トニ其旨ヲ告知ス可シ但シ民事原告人及ヒ被告人ハ其意ヲ陳述シテ裁判役ノ調書ニ之ヲ記入スルヲ求メ且其申立ツル如ク證ヲ立テ並ニ證人ヲ問糺スヲ求ムルヲ得ヘシ

但シ此等ノ求メハ第五十四條ニ記スル如ク裁決ス可シ

第八條 下吟味ノ終リシ上ニテ諸書類ヲ檢事局ノ長ニ渡シ其長ニ十四時内ニ之ヲ取調フ可シ

第九條 若シ檢察官被告人ニ輕罪又ハ註誤アリト思フ時ハ被告人其管轄ノ裁判所ニ於テ直チニ裁判ヲ受ケント欲スルヤ否ヲ問ヒ然リト答フル時ハ其裁判所ニ犯罪ノ訴ヲ移ス可シ

第十條 民事原告人ハ書記官ヨリノ書狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ又

民事原告人ハ其訴ヲ移サントスル裁判所ノ管轄異ナリシ旨ヲ述フル時ニ非サレハ直チニ其訴ヲ右裁判所ニ移スニ付キ故障ヲ述フ可カラス但シ裁判所ノ管轄異ナリシ旨ヲ述フル時ハ裁判役會議室ニ於テ其申述ノ旨ヲ裁決ス可シ

第十一條 又被告人既ニ拘留セラレタル時ハ諸書類ヲ檢察官ニ渡セシヨリ四十八時内ニ第九條ニ記シタル如ク其被告人ニ問フ可シ

第十二條 其被告人ノ答詞ヲ調書ニ記シ之ニ姓名ヲ手署セシメシ時ハ即チ管轄裁判所ノ最近ノ裁判席ニ被告人ヲ呼出シタルト同一ノ効アリト爲ス可シ但シ被告人三日ノ猶豫ヲ求ムル時ハ格別ナリトス

第十三條 民事原告人出席セサル時ハ使吏懲治罪訴訟ニ付キ呼出



チ爲ス可キ通常ノ期限ヲ遵守スルコトナク唯一日ノ猶豫ヲ許ルシ之  
ヲ呼出スコトヲ得ヘシ

第百十四條 總テ其他ノ場合ニ於テハ其訴ヲ裁判役ノ會議室ニ移ス  
可シ

第百十五條 檢察官被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キコトヲ求メサル時  
ハ會議室ニ出席スル裁判役ノ員數下吟味掛リ裁判役ヲ除キ三名ヲ  
ル可シ但シ下吟味掛リ裁判役ハ助言ヲ爲ス投言ノ權ヲ有スルノミ  
トス

第百十六條 又檢察官被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キコトヲ求ムル時  
ハ右裁判役三名ノ補佐トシテ別ニ四名ノ裁判役ヲ出席セシム可シ  
但シ其四名ハ犯罪ヲ思料ス可キ事柄ノミニ付決定ノ投言ヲ爲スノ  
權アリ

第百十七條 下吟味ノ諸書類ハ裁判役ノ會議室ニ之ヲ差出シ下吟味  
掛リ裁判役ハ其會議室ニ申立ヲ爲ス可シ

第百十八條 檢察官民事原告人被告人ハ右申立ノ席ニ立會ヒ且此等  
ノ者呼出ノ上出席スル時ハ互ニ相對シテ其說ヲ申述フ可シ但シ被  
告人ハ最終ニ言詞ヲ發ス可シ

第百十九條 被告人ヨリ特ニ求ムル時ニ非サレハ裁判席ヲ公ケニ爲  
ス可カラズ  
若シ國ノ風儀ヲ害スルノ恐アル時ニ非サレハ被告人ノ求メテ聞届  
ク可シ

第百二十條 若シ裁判役會議室ニ於テ重罪ヲモ輕罪ヲモ註誤ヲモ思  
料ス可カラスト思フ時ハ犯罪ノ訴ヲ棄ツ可キノ言渡ヲ爲ス可シ  
第百二十一條 其言渡バ之ヲ取消サント訴フ可カラズ



第二百二十二條 然レモ其被告人ニ付キ更ニ復テ犯罪訴訟ノ起ル時ハ之レカ爲メ再ヒ下吟味ニ取掛ルヲ得ヘシ

第二百二十三條 若シ裁判役會議室ニ於テ被告人ニ註誤アリト思フ時ハ其被告人ヲ註誤裁判所ニ移ス可シ

第二百二十四條 若シ裁判役會議室ニ於テ被告人ニ輕罪アリト思フ時ハ其被告人ヲ懲治罪裁判所ニ移ス可シ

又此場合ニ於テ特ニ求メテ爲ス者アラサレハ其公務ヲ以テ逮捕狀ヲ確定ス可キヤ又ハ之ヲ免除ス可キヤヲ言渡ス可シ

第二百二十五條 若シ裁判役會議室ニ於テ被告人ニ重罪アリト思フ時ハ補佐人四名ヲ加ヘテ裁判役ノ員數ヲ全ウシ被告人ヲ其重罪犯ノ訴ヲ受ケシ儘ニテ重罪裁判所ノ最近ノ裁判席ニ移ス可シ

又右會議室ニ於テハ被告人ヲ逮捕ス可キヲ言渡シ又既ニ拘留セ

ラレタル時ハ其儘拘留シ置ク可キヲ言渡ス可シ

第二百二十六條 被告人ヲ相當ノ裁判所ニ移ス裁判役會議室ノ言渡書ニハ必ス其犯罪ノ訴ヲ許ルス法律ノ箇條ヲ記入ス可シ

第二百二十七條 其言渡ハ右法律ノ箇條ニ定ムル犯罪ノ事ニ付キ二十四時内ニ控訴裁判所ニ之ヲ控訴スルヲ得ヘシ但シ其控訴ハ裁判所管轄ノ事ノミニ管ス可シ

第二百二十八條 控訴ノ場合ニ於テハ犯罪ノ訴ニ管係アル諸書類ヲ二十四時内ニ控訴裁判所ノ檢事局ニ差送ル可シ

控訴裁判所ニ於テハ檢察官ノ申立書ト各管係人ノ差出セシ覺書トヲ見タル上各人ノ居ラサル所ニ於テ裁判役會議室ヲ爲シ直チニ裁判ヲ言渡ス可シ

第二百二十九條 控訴裁判所ノ裁判役會議室ニ於テハ何時ニテモ其公



務ニ因リ又ハ特別ナル求メニ因リ追加ノ下吟味ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡スヲ得ヘシ

又其會議室ニ於テハ其指定ムル證人ヲ問糺ス可キヲ言渡シ又ハ其會議室若クハ其特ニ任セシ裁判役一名ノ面前ニ於テ云々ノ證ヲ立ツ可キヲ言渡スヲ得ヘシ

第三百十條 檢察官ハ會議室ニ於テ又ハ其特ニ任セシ裁判役一名ノ面前ニ於テ證人ノ證ヲ申立テ又ハ其他ノ方法ニテ證ヲ立テシムル時之ニ立會フ可シ又民事原告人及ヒ被告人モ其席ニ呼出サル可シ

埃及法 治罪法草案

○第二卷 裁判所

○第一章 註誤裁判所

第三百十一條 註誤裁判所ハ懲治罪裁判所ノ裁判役會議室ノ言渡ニ因リ又ハ檢察官或ハ民事原告人ヨリ呼出狀ヲ送ルニ因リ其犯罪ノ訴ヲ管轄ス可シ

第三百十二條 呼出狀ニハ路程ニ准シタル猶豫ノ外少クハ二十四時内ニ出席ス可キ旨ヲ記ス可シ又其呼出狀ニハ犯罪ノ訴ト刑法ノ箇條トヲ記入ス可シ

第三百十三條 裁判役ハ何時ニテモ原告被告又ハ檢察官ノ求メニ因リ裁判席ヲ開ク前ニ罪犯ノ證ヲ立ツ可キヲ又ハ其他總テ急速ナルヲ要スル簡約ノ下吟味ヲ爲ス可キヲ言渡スヲ得ヘシ



第三百三十四條 若シ呼出ヲ受ケタル者其定日ニ出席セス又ハ名代人  
ヲ差出サ、ル時ハ抗傳ノ儘裁判ヲ受ク可シ

第三百三十五條 右抗傳ノ儘受ケタル裁判言渡ニ付テノ故障申立ハ路  
程ノ猶豫ノ外右言渡書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ爲ス可シ但  
シ其故障申立ヲ爲シタル時ハ次ノ裁判席ニ呼出サレタルト同一ノ  
効アリトス

其故障申立書ハ書記局ニ差出シ裁判席ヲ開クヨリ二十四時前ニ之  
ヲ民事原告人ニ送ル可シ  
民事原告人ノ抗傳ノ儘受ケタル裁判言渡ニ付テノ故障申立ハ之ヲ  
取上ク可カラス

第三百三十六條 裁判席ハ必ス公ケタル可ク又其裁判席ニ於テハ調書  
ヲ讀上ケ且出席シタル證人ノ申立ヲ聽ク可シ

證人ハ之ヲ出シタル者最初ニ其問糺ヲ爲シ其他ノ者次第ニ問糺ヲ  
爲ス可シ

被告人ハ何時ニテモ自カラ其出シタル者ニ非サル證人ヲ最終ニ問  
糺スヲ得ヘシ

裁判所長ハ何時ニテモ其相當ト思フ諸件ヲ其公務ヲ以テ證人ニ問  
糺スヲ得ヘシ

又裁判所長ハ不適當ナリト爲シ棄却シタル間ニ付キ獨斷ヲ爲スノ  
權アリ

又裁判所長ハ其後檢察官民事原告人被告人ノ申立及ヒ辨解ヲ聽ク  
可シ但シ被告人ハ必ス最終ニ詞ヲ發ス可シ

第三百三十七條 證人ハ本人之ヲ呼出シ又ハ本人之ヲ連レ來ル可シ

裁判席ノ書留ニハ前ニ記シタル法式ヲ行フタル旨ヲ證ス可シ



第三百三十八條 裁判ハ裁判席ニ於テ直ニ之ヲ言渡シ又ハ遅クモ次ノ裁判席ニ於テ之ヲ言渡ス可シ

第三百三十九條 警察規則ニ背キタル罪ニ付テハ相當ナル官吏ノ記シタル調書ヲ以テ其證據ト爲ス可シ但シ之ニ反シタル證ノ出テ來ル時ハ格別ナリトス

第四百十條 十六歳以上ノ證人ハ眞實ヲ述ヘ眞實ノ外述ヘサルノ誓ヲ爲ス可シ○右證人ニハ其證人故障ノ申述ヲ受ク可キ景狀ノ中ニ在リヤ又ハ一方ノ者ノ使用ヲ受クル者タルヤヲ問フ可シ

第四百十一條 宗系ノ血屬及ヒ姻屬ノ親又ハ兄弟姉妹及ヒ之ノト同級ノ姻屬ノ親ハ故障ノ申述ヲ受クルコトアル可ク且ツ嘗テ故障ノ申述ヲ受ケタル時ハ其申立ヲ聽ク可カラズ但シ故障ノ申述ヲ受ケサル時ハ其申立ヲ聽クト雖モ之カ爲メ裁判手續ノ効ヲ失フコトナカル

可シ

第四百十二條 書記官ハ證人ノ姓名職業住所ヲ書留メ且ツ其證人ノ本人ノ血屬又ハ姻屬ノ親或ハ其僕婢タルノ申立ヲ書留ム可シ

第四百十三條 若シ被告人ヲ禁錮ス可キ事情アリテ現ニ其禁錮ヲ言渡ス時ハ裁判役前條ニ記シタル證人ノ申立書ヲ視テ之ヲ允諾ス可シ

第四百十四條 若シ被告人ノ訴ヘラレタル事柄註誤ニアラス又輕罪及ヒ重罪タリト思料ス可カテサル時ハ裁判役無罪ナリト言渡ス可シ

然レモ其裁判役ハ簡約吟味裁判所ノ權限内ニ於テ雙方互ニ討索スル償ヲ裁判スルコト得ヘシ

第四百十五條 若シ被告人ニ輕罪或ハ重罪アリト思料ス可キ時ハ右



裁判役己レノ其犯罪吟味ヲ爲ス可キ權ナキ旨ヲ言渡シ諸證書類ト共ニ雙方本人等ヲ檢察官ノ面前ニ出テシメ檢察官ヨリ其管轄ノ裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ニ之ヲ訴出ス可キ

第四百四十六條 刑罰ノ言渡書ニハ其言渡ヲ爲スノ原由タル犯罪ノ事柄ト適用シタル法律ノ箇條トヲ記ス可ク若シ之ヲ記セサル時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第四百四十七條 裁判席ニ立會フ書記官ハ裁判言渡ノ本日内ニ其言渡書ノ正本ニ姓名ヲ手署ス可ク若シ此規則ニ背ク時ハ百フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百四十八條 註誤裁判役ハ檢察官ノ説ヲ聽キタル上ニテ刑ヲ言渡ス可シ

第四百四十九條 裁判言渡ノ執行ハ檢察官ト民事原告人ト各其己レニ

管スル事ニ付キ其手續ヲ求ム可シ

第五百十條 禁錮ノ刑ヲ言渡ス裁判言渡ハ控訴ヲ爲スヲ得ヘシ

第五百十一條 控訴ハ雙方出席ノ上受ケタル裁判言渡又ハ一方抗傳シテ受ケタル言渡ニ付キ申立タル故障ニ付テノ裁判言渡ヨリ三日内又ハ一方抗傳シテ受ケタル裁判言渡ニ付キ故障ヲ申立ツ可キ期限ノ終リシ三日内ニ之ヲ書記局ニ申立ツ可シ

第五百十二條 控訴ハ徵治罪裁判所ニ之ヲ爲シ檢察官ハ其裁判所ニ處刑ヲ求メテ被告人及ヒ民事原告人ヲ三日内ニ呼出ス可シ

第五百十三條 檢察官及ヒ刑ヲ言渡サレシ被告人ハ前條ニ記スル期限内ニ左ノ場合ニ於テハ控訴裁判所ニ訴フルヲ得ヘシ但シ控訴ヲ爲シ得ヘキ裁判言渡ニ付テハ其期限ヲ倍シ且ツ控訴ノ上受ケタル裁判言渡ノ日ヨリ其期限ヲ算ス可シ



第一 裁判官渡書ニ記スル事柄ノ註誤ニ非ラス又總テ罰ス可キ事ニ非サル時

第二 裁判官渡書ニ記スル事柄ハ之ヲ罰ス可シト雖モ適用シタル法律ニ誤アル時

第三 訴訟手續又ハ裁判官渡ノ本質ニ其効ナキ事アル時

第五十四條 控訴裁判所ニ於テハ檢察官ト原被告人又ハ其名代人ノ申立ヲ聽キタル上ニテ控訴ヲ裁判ス可シ

前條ニ記スル第一ノ場合ニ於テハ被告人ノ無罪タル旨ヲ言渡ス可シ

第二ノ場合ニ於テ註誤ノ罪アル時ハ刑法ヲ適用シテ裁判ヲ言渡シ又更ニ重キ罪アル時ハ管轄ノ裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ニ其犯罪ノ吟味ヲ移ス可シ

第三ノ場合ニ於テハ是レ迄ト異ナリタル註誤裁判所ニ其罪ノ吟味ヲ移シ更ニ其裁判ヲ爲サシメ可シ

右控訴ヲ爲スニハ書記局ニ届テ爲シ裁判席ヲ開クヨリ三日前ニ被告人ヲ呼出ス可シ

一方ヨリ其相手方ニ損失ヲ償フ可キ言渡ハ控訴ニ管セス其効アリトス但シ此卷ノ第四章ニ記スル方法ヲ以テ其言渡ノ取消ヲ訴出シタル時ハ格別ナリトス

第五十五條 註誤裁判役ハ三ヶ月ノ間ニ爲シタル裁判官渡書ノ表ヲ三ヶ月毎ニ檢察官ニ送ル可シ

○第二章 懲治罪裁判所 即チ輕罪裁判所

九四八 第五十六條 懲治罪裁判所ハ法律上ニ輕罪 即チ懲治罪 犯罪ヲ裁判ス可シ



第一百五十七條 懲治罪裁判所ハ檢察官又ハ民事原告人ノ訴ニ因リ又ハ裁判役會議室ヨリ訴ノ吟味ヲ移セシニ因リ其犯罪ノ訴訟ヲ管轄ス可シ

第一百五十八條 其裁判所ノ官員ハ會議室ニ於テ言渡ヲ爲ス者ノ外裁判役三名及ヒ決議ノ投言ヲ爲シ得ヘキ輔佐四名タル可シ〇此等ノ裁判役ハ可否ヲ述フル者ノ數ニ從ヒ裁判ヲ言渡ス可シ  
下吟味掛リ裁判役ハ右裁判役ノ員中ニ加ハルヲ得ス

第五十九條 法律上ニ於テ禁錮ノ刑ニ處ス可キ罪ヲ訴ヘラレシ被告入ハ自カラ裁判所ニ出席ス可シ  
其他ノ場合ニ於テハ名代人ヲ出スヲ得ヘシ但シ裁判所ニ於テハ本人自カラ出席ス可キヲ言渡スヲ得ヘシ若シ其言渡ニ循ハサレハ抗傳ノ儘其刑ヲ言渡ス可シ

第六十條 若シ被告人出席セサル時ハ證書類ヲ檢視セシ上ニテ抗傳ノ儘其裁判ヲ言渡ス可シ

第六十一條 抗傳セシ被告人ハ第三百三十五條ニ記シタル期限内ニ其裁判言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ且ツ其故障ヲ述ヘタル時ハ次キノ裁判席ニ呼出ヲ受ケタルト同視ス可シ  
其故障ノ申述書ハ書記局ニ差出ス可シ

民事原告人アル時ハ其故障申述書ト次ノ裁判席ヘノ呼出狀トヲ其原告人ニ送ル可シ

第六十二條 公ケノ裁判席ニ於ケル吟味ノ手續ハ第三百三十六條ニ記シタル方法ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

第六十三條 其裁判席ニ於テハ犯罪證書類ノ相違ナキ旨ヲ證スル吟味手續ノ書類ノ外其他ノ吟味手續ノ書類ヲ讀上ク可カラス



第六十四條 然レハ裁判所長、檢察官及ヒ原被告人ハ差支アリテ出席セサル證人又ハ鑒定人ノ申立書或ハ呼出ノ上出席セサル證人又ハ鑒定人ノ申立書ヲ必得ノ爲メ讀上シルヲ得ヘシ

第六十五條 被告人問糺ノ旨又ハ吟味手續ヲ爲スニ方リ被告人ノ申述ヘシ旨ハ之ヲ公ケニ爲ス可カラズ

第六十六條 若シ裁判所長又ハ裁判役又ハ檢察官前二條ニ記スル規則ニ背シ時ハ裁判言渡ノ効ナカル可シ

第六十七條 證人吟味ノ前ニ檢察官及ヒ民事原告人ハ其證セント欲スル事柄ノ要略書ヲ出スヲ得ヘシ

又被告人ハ之ニ反シタル事柄ノ要略書ヲ出スヲ得ヘシ

第六十八條 裁判所ニテ吟味手續ヲ爲スニ方リテハ證人又ハ鑒定人ノ申立ヲ爲シ終リタル後被告人ニ其申立ノ各條ニ付キ己レノ意

ヲ申述ヘントスルヲアリヤ否之ヲ問フ可シ

第六十九條 下吟味ノ終リタル後裁判所ニ於テハ檢察官、民事原告人、被告人ノ辨解ヲ聽ク可シ

被告人ハ必ス最終ニ詞ヲ發ス可シ

第七十條 被告人拘留セラレタル時ハ最初ノ裁判席ニ於テ裁判ヲ言渡ス可シ

被告人拘留セラレサル時ハ次ノ裁判席ニ於テ裁判ヲ言渡スニ妨ナシトス

第七十一條 若シ裁判所ニ於テ被告人ノ訴ヘラレシ事柄ヲ法律上ニ於テ有罪ト爲サズ又ハ其訴ヘラレシ事柄本人ノ所爲ニ非ス或ハ被告人ニ罪アリト雖モ既ニ期滿免除ノ期ニ至リシヲ知ル時ハ被告人ヲ無罪ナリト言渡シ雙方ノ互ニ要需シ得キ損失ノ償ヲ裁判



ス可シ

第七十二條 被告人ノ訴ヘラレシ事柄ノ輕罪又ハ註誤タル時ハ裁判所ニ於テ其刑ヲ言渡シ且ツ民事原告人ノ要ムル損失ノ償ヲ裁判ス可シ

第七十三條 其裁判言渡書ニハ第四百四十六條ニ記シタル諸件ヲ記ス可シ

第七十四條 若シ被告人ニ重罪アリト思料スル時ハ裁判所ヨリ原被告人ヲ檢察官ノ面前ニ出テシメ檢察官ヨリ下吟味掛リ裁判役ニ之ヲ訴フ可シ

第七十五條 被告人ヲ刑ニ處スル裁判言渡ハ第五百十三條及ヒ第五百十四條ニ記シタル場合ト法式トニ非サレハ之ヲ取消サント訴フ可カラス但シ第五百十三條ニ記スル第二ノ場合ニ於テ輕罪又ハ

註誤ニ付キ控訴裁判所ヨリ刑ヲ言渡シ又同條第三ノ場合ニ於テ控訴裁判所ヨリ犯罪ノ裁判ヲ是迄ト異ナレル裁判役ノ出席ヲ爲ス懲治罪裁判所ニ移シ又ハ是迄ト全ク異ナレル懲治罪裁判所ニ移ス時ハ格別ナリトス

第七十六條 第四百十條、第四百十一條、第四百十二條ニ記スル法式ハ懲治罪裁判所ニ於テモ亦之ニ循フ可シ

第七十七條 第四百十七條及ヒ第四百十九條ニ記シタル所モ亦之ヲ適用ス可シ

○第三章 重罪裁判所

第七十八條 重罪裁判所ハ控訴裁判所ノ裁判役會議室ヨリ犯罪ノ訴ヲ移ス言渡アルニ非サレハ重罪ノ訴訟ヲ管轄ス可カラス

第七十九條 重罪裁判所ハ控訴裁判所ノ裁判役三名ヨリ成リ陪審



ノ決定ニ從ヒ法律ヲ適用ス可シ

第一百八十条 重罪裁判所ハ三ヶ月毎ニ少クハ一度裁判席ヲ開ク可ク且ツ其席ヲ開クニ方リテハ既ニ裁判シ得ヘキ模様ニ至リシ總テノ重罪犯ノ訴訟ヲ其裁判所ニ申告ス可シ

第一百八十一条 重罪裁判所ノ通常裁判席ヲ閉チタルヨリ更ニ其後ノ通常裁判席ヲ開クニ至ル可キ時間ニ生シタル重罪訴訟ヲ裁判スル爲メ又ハ公ケノ資益ニ管シ或ハ當然ノ疑ヲ可キアルニ因リアルニ「キサン・ドリー」ノ裁判所管轄地外ニ於テ裁判スルノ必要ナル重罪ヲ右裁判所管轄地外ニ於テ裁判ス可キ席ヲ開クカ爲メ控訴裁判所ニ於テハ臨時裁判席ヲ開ク可キヲ決定スルヲ得ヘシ

第一百八十二条 控訴裁判所ノ裁判役ハ其任職ノ順序ヲ以テ更ニ重罪裁判所ニ出席シ控訴裁判所ノ副長在ラサル時ハ最モ先キニ任職セシ

者ヲ重罪裁判所ノ長ト爲ス可シ

名義ノ如何ヲ問ハス總テ是迄重罪訴訟ノ吟味ニ管係セシ裁判役ハ重罪裁判所ニ出席スルヲ得ス

○第一款 陪審

第一百八十三条 三年以上埃及ニ住シ其齡三十歳以上ノ者ハ何人ニ限ラズ陪審姓名目錄中ニ之ヲ加フ可シ

裁判役ハ其目錄中ニ記ス可カラス又行政官局ノ長ハ其目錄中ヨリ己レノ姓名ヲ除去セシムルヲ得ヘシ

第一百八十四条 輕重罪ノ爲メ禁錮ノ刑ヲ言渡サレシ者及ヒ未タ復權ヲ得サル家資分散人ハ陪審姓名目錄中ニ加フ可カラス

第一百八十五条 然レモ政府ハ別段ノ規則ヲ設ケ國人ヲ陪審姓名目錄中ニ加フルニ付キ特別ナル箇條ヲ定ムルヲ得ヘシ



第八十六條 陪審ノ姓名目録ハ毎年之ヲ公ケニ爲ス可シ○其目録中ニ加ヘラレサル者ノ之レニ加ハラント爲ス訴及ヒ其目録中ニ加ヘラレシ者ノ其中ヨリ除去セラレント爲ス訴ハ直ニ之ヲ裁判所ニ爲ス可シ

第八十七條 此等ノ訴ヲ爲ス者ハ二十四時間ニ檢事長ヲ裁判所ニ呼出シ之ヲ相手取り至急ノ裁判ヲ得ント求ム可シ但シ其訴人モ亦裁判席ニ出ツ可シ

第八十八條 人ノ姓名ヲ陪審姓名目録中ヨリ塗抹スル裁判言渡ハ確定ノ者トス但シ家資分散人其言渡ノ後ニ復權ヲ得タル時ハ格別ナリトス

第八十九條 裁判席ニ立會セシ陪審後ニ其姓名ヲ陪審姓名目録中ヨリ塗抹セラルト雖モ其裁判言渡ノ効ヲ失フコトナカル可シ

第九十條 重罪裁判所ノ裁判席ヲ開クヨリ十五日前ニ控訴裁判所ノ公ケノ裁判席ニ於テ本國人ノ陪審三十六名及ヒ其補員四名ト外國人ノ陪審及ヒ其補員ノ相當ノ數トヲ圖引キニ爲ス可シ陪審ノ補員ハ重罪裁判所ノ裁判席ヲ開ク可キ地ニ居住ス可シ若シ陪審ノ姓名目録ヲ記シタル後ニ死去シ或ハ陪審タルノ權ヲ失ヒシ者アル時ハ控訴裁判所ノ裁判席ニテ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上其姓名ノ塗抹ヲ言渡ス可シ

第九十一條 然レモ重罪裁判所ノ裁判席ヲ開クヨリ八日前ニ被告人後ノ數條ニ記スル景狀ニ於テハ特別ナル陪審ノ裁決ヲ得ント欲スル旨ヲ拘留場ノ書記局ニ申立ツルコトヲ得ヘシ

第九十二條 前條ニ記スル日附ノ前ニ民事原告人ノ犯罪訴訟ニ管スル者アラサル時ハ被告人自國人ノ過半タル陪審ノ裁定ヲ得ント



欲スル旨ヲ述フルヲ得ヘシ但シ此場合ニ於テハ被告人ト國ヲ同  
ウスル陪審數名ヲ闕引ニ爲シ以前ヨリ陪審ノ列ニ加ハリシ者ヲ合  
算シテ其數二十一名ニ至ルニ及ヒ其闕引ヲ止ム可シ

第九十三條 若シ被告人ト國ヲ同ウスル陪審ノ數其定員タル四十  
二名ニ足ラサル時ハ被告人更ニ他ノ國民ヲ指示シ其國ニ屬スル陪  
審ノ數ヲ被告人ト國ヲ同ウスル陪審ノ數ニ合シ少クハ四十二名ニ  
至ラシム可シ但シ此場合ニ於テハ右二國ノ陪審ノ數ヲ合シ罪犯ノ  
訴ヲ裁定ス可キ陪審ヲ闕引ニ爲ス可シ

第九十四條 第九十一條ニ記セシ期限ノ前ニ民事原告人罪犯ノ  
訴ニ管シタル時ハ原告及ヒ被告ヨリ互ニ其相手方ノ同國人ヲ陪審  
中ニ加ヘサル可キ旨ヲ求ムルノ權アリ但シ此場合ニ於テハ其故障  
アル國ノ人民ヲ除キ陪審三十六名ト補員四名トノ目錄ヲ完全スル

爲メ追補ノ闕引ヲ爲ス可シ

此條ト前三條トニ記スル權利ヲ行ハント欲スル者ハ重罪裁判所ノ  
裁判席ヲ開クヨリ八日前ニ書記局ニ其旨ヲ申述フ可シ但シ其本日  
若シ祭禮ノ日ニ當ル時ハ二十四時ノ猶豫ヲ許ルストヲ得ヘシ

第九十五條 若シ民事原告人前ニ記スル期限ノ後ニ犯罪訴訟ニ管  
セシ時ハ被告人ノ其民事原告人ト國ヲ同ウスル陪審ニ付キ故障ヲ  
述フ可キ權ヲ更ニ大ナラシメ民事原告人ト國ヲ同ウスル陪審全員  
ノ半ハニ至ル迄ノ數ニ付キ故障ヲ述フルヲ得セシム可シ  
第九十六條 何人ニ限ラヌ一ケ年ニ二度以上重罪裁判所ノ陪審ヲ  
ルニ及ハス

然レハ重罪裁判所ノ裁判席ヲ開ク間故障ヲ述ヘテ出席セサリシ陪  
審ハ前項ノ旨ヲ申立テ更ニ出席スルヲ免カル可カラス



○第二款 裁判席ヲ開ク前ノ手續

第九十七條 檢事長ハ被告人ニ左ノ書類ヲ送達ス可シ

第一 裁判席ヲ開クヨリ五日前ニ裁判席ニ立會フ陪審ノ姓名目

録

第二 右ト同一ノ期限内ニ諸種ノ調書、鑑定人及ヒ證人ノ申立書

但シ寫書ニ誤アリ又ハ遺脱アリト雖モ之カ爲メ其効ヲ失フ

ナカル可シ

第三 裁判席ヲ開クヨリ三日前ニ出席ス可キ呼出狀但シ其呼出

狀ニハ重罪裁判所ニ犯罪ノ吟味ヲ移ス裁判役會議室ノ言渡ヲ

記入ス可シ

第四 裁判席ヲ開クヨリ二十四時前ニ檢事長ノ呼出サントスル

證人ノ姓名目錄

第九十八條 被告人及ヒ民事原告人ハ裁判席ヲ開クヨリ二十四時

前ニ其呼出サントスル證人ノ姓名目錄ヲ互ニ送達シ且ツ重罪裁判

所ノ書記局ニ其姓名目錄ヲ出シテ檢事長又ハ其代役ニ之ヲ送達セ

シム可シ

第九十九條 前以テ其姓名目錄ヲ送達セサル證人ハ重罪裁判所ノ

允許ヲ得サレハ之ヲ呼出シ其申立ヲ聽ク可カラズ但シ重罪裁判所

ニ於テハ其申立ヲ聽クト雖モ無益タルヲ思フ證人又ハ遠隔ノ地ニ

在ル證人ハ之ヲ呼出スヲテ允許セサル可シ

第二百條 重罪裁判所ノ長ハ裁判席ヲ開ク可キ日ヲ定メ且ツ檢事長

ノ申立ヲ聽キタル上ニテ各犯罪ノ訴ヲ吟味ス可キ順序ヲ定ム可シ

第二百一條 若シ一箇ノ犯罪ノ訴ヲ吟味スルニ付キ意外ニ手間取ル

ナル時ハ最初ノ呼出狀ニ據テ原告被告雙方共ニ次キノ裁判席ニ



出席シ又然ノミナラス其後ノ裁判席ニモ出席ス可シ  
然レモ如何ナル場合ニ於テモ原告被告雙方ノ願アルニ非サレハ預  
定セシ期日ノ前ニ犯罪ノ訴ヲ吟味ス可ガラス

第二百二條 重罪裁判所ノ長ヨリ委任ヲ受ケシ一官吏ハ最初裁判席  
ヲ開クヨリ少クモ五日日前ニ陪審ヲ招集ス可シ但シ其住所ノ路程ニ  
准シ相當ノ猶豫ヲ許ルス可シ  
各陪審ニ親シク其招集書ヲ渡シタルヤ又ハ其住所ニ差置キタルヤ  
之ヲ調書ニ記ス可シ

第二百三條 証人ハ裁判席ヲ開クヨリ二十四時前ニ之ヲ呼出ス可シ  
但シ其住所ノ路程ニ准シ相當ノ猶豫ヲ許ルス可シ

第二百四條 犯罪訴訟ノ吟味手續ニ管スル諸書類ハ書記局ニ於テ雙  
方代言人ノ求メニ應シ之ヲ示ス可シ其書類ハ他所ニ携ヘ行ク可カ

ラス但シ檢事局ノ要用タル時ハ格別ナリトス

○第三款 重罪裁判所ノ裁判席雙方ノ論辨裁判言渡ノ事

第二百五條 最初裁判席ヲ開キタル日ニ姓名目録ニ記シタル各陪審  
ノ姓名ヲ呼上ク可シ出席ヲ免レントスル各陪審ハ其事由ヲ申立ツ  
可シ

重罪裁判所ハ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上ニテ其事由ノ正當ナルヤ  
否ヲ裁判ス可シ

第二百六條 重罪裁判所ハ呼出ニ應シテ出席セサル陪審ニ二百フテ  
ソクノ罰金ヲ言渡ス可シ但シ其出席セサル事由ノ正當ナルヲ明白  
ナル時ハ格別ナリトス○右罰金ヲ一旦言渡サレシ陪審重罪裁判所  
ノ會議ヲ閉ル前ニ出席シ其管テ出席セサリシ正當ノ事由ヲ辨解ス  
ル時ハ其罰金ヲ免ル、トナ得ヘシ



又右裁判席ヲ閉ナシ後ト雖モ其陪審罰金言渡書ノ送達ヲ得タルヨ  
リ三日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フル時ハ前項ニ記シタル權利ヲ  
失フコトナシ

右ノ場合ニ於テハ控訴裁判所ニ其故障ヲ申立ツ可シ

第二百七條 又裁判席ヲ開ク時ニ方リ陪審ノ不在ナル時ハ前條ニ記  
セシ所ニ同シキ罰金ヲ言渡ス可シ但シ其陪審其不在ナル事由ヲ述  
フル時ハ之ヲ裁判ス可シ

第二百八條 如何ナル場合ニ於テモ本國人又ハ外國人ノ陪審ノ數補  
員ヲ合シテ二十四名以下ナル時ニ非サレハ陪審ノ數ノ不足ナルニ  
因リ其裁決ヲ取消ス可カラズ

第二百九條 各犯罪訴訟ノ裁判席ヲ開ク前ニ裁判役ノ會議室ニ於テ  
被告人及ヒ其代言人ト檢察官ノ面前ニテ出席ノ義務ヲ免レサル各

〇へ

陪審ノ姓名ヲ呼上ケ其姓名票ヲ順序ヲ逐テ壺中ヨリ取り出ス可シ  
第二百十條 被告人ハ陪審ノ姓名目錄中ニテ其十五名ニ付キ故障ヲ  
述フルコトヲ得ヘシト雖モ必ス故障ノ申立ヲ受ケサル陪審十二名ヲ殘ス可  
クヲ得ヘシト雖モ必ス故障ノ申立ヲ受ケサル陪審十二名ヲ殘ス可  
シ但シ陪審中ニ不在ノ者アリ又ハ正當ノ事由アリテ出席セサル者  
アル時ハ其數ニ准シ檢察官ノ故障ヲ申立ツ可キ陪審ノ數ヲ減ス可  
シ

第二百十一條 陪審ニ付キ故障ヲ申立ツル爲メニハ其旨趣ヲ指示ス  
ニ及ハス

第二百十二條 故障ノ申立ヲ受ケサル陪審十二名ノ姓名票壺中ヨリ  
出テタル時其十二名ヲ以テ裁判席ノ陪審ト定ム可シ

第二百十三條 第九十二條ニ記シタル場合ニ於テハ先ツ被告人ト



國ヲ同ウスル陪審二十一名ノ中ニテ闕引ニ爲ス可シ  
 被告人ト檢察官トハ各陪審七名ニ付キ故障ヲ申立ツルヲ得ヘシ  
 陪審二十一名中ノ一名又ハ數名ノ不在ナル時又ハ正當ノ事由アリ  
 テ出席セサル時ハ其數ニ准シ檢察官ノ故障ヲ申立ツ可キ陪審ノ數  
 ナ減ス可シ  
 故障ノ申立ヲ受ケサル陪審七名ノ姓名票壺中ヨリ出テタル後ハ前  
 條ニ記シタル如ク重罪裁判所ノ諸犯罪訴訟ニ定メタル陪審總目錄  
 中ヨリ闕引ニ爲ス可シ  
 此第二次ノ闕引ニ付キ被告人及ヒ檢察官ノ陪審ニ付キ故障ヲ申立  
 ツ可キ權ハ互ニ同等ナリトス但シ如何ナル場合ニ於テモ被告人ハ  
 少クモ陪審五名ニ付キ故障ヲ申立ツルノ權アリ  
 第二百十四條 若シ被告人數名アリテ共議ノ上陪審ニ付キ故障ヲ申

立テタル時ハ其各名互ニ同一ノ員數ニ付キ故障ヲ申立ツルヲ得  
 ヘシ但シ其數名ニ其故障ヲ申立ツ可キ陪審ノ全員ヲ平當ニ分ツ能  
 ハサル時ハ陪審ノ姓名ヲ呼上ル前ニ闕引ニ爲シテ陪審ノ最多數ニ  
 付キ故障ヲ申立テ得可キ被告人ヲ定ム可シ  
 又被告人數名ハ故障申立ノ或員數ニ付キ互ニ共議スルヲ得ヘシ  
 但シ其餘ノ手續ハ前ニ記セシ所ト同一ナル可シ  
 第二百十五條 陪審ヲ闕引ニ爲シタル後重罪裁判所ニ於テ公ケノ裁  
 判席ヲ開ク可シ  
 第二百十六條 被告人ハ繼續ヲ免レテ裁判席ニ出ツ可シ但シ被告人  
 ニ對シ取締ノ處置ヲ行フ可キハ此例ニ非ス  
 被告人ノ人違ヒニ非サルコトハ其姓名、年齡、職業、住所、出生ノ地、其所屬  
 ノ國ヲ申述ヘシメテ之ヲ證ス可シ



第二百十七條 被告人ハ必ス其代言人ノ助ヲ受ク可ク若シ然ラサルハ裁判言渡ノ効ナカル可シ

其代言人ハ控訴裁判所ニ於テ其職ヲ行ヒ得可キ權アル代言人タル可シ但シ裁判所長ヨリノ特許アル時ハ格別ナリトス

第二百十八條 陪審ハ次序ヲ逐テ誓ヲ爲ス可シ但シ其誓詞ハ左ノ如シ

予ハ我本心ニ循ヒ被告人ノ告訴セラレタル罪條ト其答辨ノ旨趣トニ基キ裁定ヲ爲ス可シ

第二百十九條 然ル後ニ其犯罪告訴ノ吟味ヲ重罪裁判所ニ移シタル言渡書ヲ讀聞カス可シ

第二百二十條 證人ハ之ヲ呼出シテ特ニ之カ爲メ設ケタル室内ニ控ヘシメ次第ニ一人ツ、之ヲ呼出シテ其證ヲ申述ヘシム可シ

第二百二十一條 既ニ證ヲ申述ヘ了リシ證人ハ雙方論辨ノ終ルニ至ル迄裁判席ニ止マリ居ル可シ但シ裁判所ノ特許アル時ハ格別ナリトス

第二百二十二條 甲ノ證人ニ乙ノ證人ノ其證ヲ申述フル時間他席ニ退ク可キノ言渡ヲ爲シ又ハ甲ノ證人ヲシテ乙ノ證人ト互ニ相對シテ論辨セシムルヲ得ヘシ

第二百二十三條 論辨ノ終ラサル間ハ如何ナル原由アリト雖モ被告人ヲ他席ニ退カシム可カラス但シ被告人甚シキ騷擾ヲ起ス時ハ格別ナリトス

第二百二十四條 吟味ノ手續ニ付テハ第六十二條第七十六條第百七十七條ノ規則ヲ適用ス可シ

一七八 第二百二十五條 裁判所ニ於テハ證人及ヒ鑑定人ニ付テノ故障申立



ヲ裁判ス可シ

第二百二十六條 論辨ノ終リタル後裁判所長ヨリ其解明ス可キ問ノ箇條ヲ定ム可シ但シ其問ノ箇條ハ犯罪訴訟ヲ重罪裁判所ニ移ス言

渡又ハ論辨ノ事情ニ因テ之ヲ定ム可シ

右問ノ箇條ハ之ヲ讀上ク可シ

各箇ノ重要ナル事ニ付キ其問ノ詞ハ左ノ如シ

被告人ハ云々ノ謀殺云々ノ盜奪ヲ行ヒタルノ罪アリヤ

又犯罪ヲ重劇ナラシム可キ各箇ノ摸樣ニ付テハ特別ナル問ヲ設ク

可シ

又罪ヲ宥恕セシム可キ摸樣、期滿免除、被告人ノ幼年ナル事又ハ幼年

ト雖モ故意ヲ以テ罪ヲ犯シタル事ニ付テモ亦前項ニ記スル如ク爲

ス可シ

若シ又被告人ノ罪ヲ輕減セシム可キ摸樣アル時ハ特ニ其問ヲ設ク可シ

第二百二十七條 檢察官又ハ代言人ハ問ノ設ケ方ヲ論スルコトヲ得ヘ

第二百二十八條 裁判所ハ前條ニ記スル附帶ノ訴訟ヲ裁判ス可シ○

右ノ問ヲ定メタル上ハ陪審評議ヲ爲スタメ別席ニ退ク可シ

官用ノ文詞ヲ以テ記シタル右問ノ目錄ト次キノ六條ノ拔書トハ之

ヲ陪審ニ渡ス可シ

第二百二十九條 陪審ハ其決定ヲ爲シタル後ニ非サレハ評議ノ室ヲ出ツ可カラス

陪審ハ其決定ヲ爲スニ至ル迄ハ他人ト詞ヲ參ユ可カラス若シ此規  
則ニ背シ時ハ四千ピアストルノ罰金ヲ言渡サル可シ但シ其罰金ハ



檢察官ノ求メニ因リ裁判所ヨリ速カニ之ヲ言渡ス可シ

第二百三十條 陪審ハ最初犯罪告訴ノ主タル事柄ヲ決定シ次キニ其事柄ニ附加シタル模様ヲ決定シ終ニ犯罪ヲ輕減ス可キ模様ヲ決定ス可シ

第二百三十一條 開引ノ時最初開ニ當リタル陪審又ハ其者ノ在ラサル時ハ陪審互ニ協議シテ其長ト定メタル者各問題ヲ高聲ニ讀上ケ然ル後陪審其各問題ニ付キ密カニ可否ノ投言ヲ爲ス可シ

第二百三十二條 陪審ハ各種ノ證ヲ得ント要ムルコトナク且ツ其決定ノ爲メ被告人如何ナル刑ニ處セラル、ヤチ考慮スルコトナク獨リ其本心ノ信スル所ノミニ循ヒ決定ヲ爲ス可シ

若シ其本心ニ於テ被告人ニ罪アリト思ヒ又ハ云々ノ模様ニ確證アリト思ハ、然リト答ヘ之ニ反シタル場合ニ於テハ否ト答フ可シ

第二百三十三條 陪審一箇ノ問題ニ付キ投言ヲ爲シタル後其投言ノ數ヲ算シ然ル後次キノ問題ノ投言ニ取掛ル可シ

主タル問題ニ付キ否トノ答アル時ハ之ニ附帶セル問題ニ付キ投言ヲ爲スニ及ハス

第二百三十四條 可トスル投言ト否トスル投言トノ數ヲ算シ其多キ方ニ決定ス可シ若シ又可トスル數ト否トスル數ト相同シキ時ハ其決定ヲ否トスル者ト定ム可シ但シ犯罪ヲ宥免ス可キ模様、期滿免除、被告人ノ幼年等ニ管スル問ニ付テハ格別ナリトス

一箇ノ問ニ答ヘタル毎ニ陪審ノ長其決定ノ旨ヲ書面ニ記シテ之ヲ證ス可シ

陪審ノ全員中七名以上可トスル時ハ全員ノ半ハ以上ニテ然リトスト記ス可シ



又全員ノ七名以上否トスル時ハ全員ノ半ハト云ヘル語ヲ記スルコトナク只否ト記ス可シ此條ノ第一項ニ記シタル三箇ノ場合ニ於テハ否トスル答ニ定マリタル時ノミ否トスル者全員ノ半ハ以上タル旨ヲ記ス可シ

第二百三十五條 陪審ノ長ハ決定書ノ末ニ姓名ヲ手署シ且ツ其各業ニ姓名ノ手署ニ代用スル横線ヲ畫ス可シ

第二百三十六條 陪審ノ決定ヲ爲シ終リタル後被告人ヲ遠サケテ更ニ裁判席ヲ開ク可シ

第二百三十七條 陪審ノ長ハ陪審ノ答書ヲ讀上ク可シ

第二百三十八條 若シ陪審ノ問題ニ答ヘサル時又ハ其答ノ中ニ此彼齟齬シタルコトアル時又ハ決定書ニ陪審答書ノ姓名ノ手署或ハ全員ノ半ハ以上云々ト記ス可キニ若シ過テ記セサルコト其文面ニ就キ

知リ得可キ時ハ裁判所ニ於テ其公務ニ因リ又ハ檢察官ノ求メ或ハ代言人ノ求メニ因リ陪審ヲシテ更ニ再度別室ニ退キ前ニ記スル錯誤ヲ改メシム可シ

陪審其答フ可キ問題ニ答ヘサル時ノ外ハ問題ノ本案ヲ更ニ再議スルニ及ハス

第二百三十九條 裁判所長ハ裁判席ニ於テ書記官ト共ニ陪審ノ答書ニ姓名ヲ手署ス可シ

第二百四十條 然ル後被告人ヲ裁判席ニ呼出シ陪審ノ決定書ヲ讀聞カス可シ

第二百四十一條 陪審ノ答否ナリト云フ時ハ裁判所ニ於テ被告人ノ無罪タル旨ヲ言渡シ且ツ之ヲ釋放ス可キ旨ヲ言渡ス可シ但シ他ニ原因アリテ拘留セラレタル時ハ格別タル可ク且ツ其旨ヲ拘留場ノ



書記局ニ告知シテ囚徒姓名簿ニモ其旨ヲ記シ置ク可シ

第二百四十二條 陪審被告人ニ罪アリト答フル時ハ檢察官ヨリ刑律適用ノ旨ヲ裁判所ニ求ム可シ

第二百四十三條 被告人及ヒ其代言人ハ法律適用ノ事ノミニ付キ其意ヲ申立ルコトヲ得ヘシ

第二百四十四條 若シ陪審ノ確的ナリト答ヘタル事柄ノ法律上ニテ重罪、輕罪、註誤ト爲ス者ニ非サル時ハ裁判所ヨリ被告人ヲ免ルス旨ヲ言渡シ且ツ之ヲ釋放ス可キ旨ヲ言渡ス可シ

第二百四十五條 若シ然ラサル時ハ縱令重罪裁判所ニ於テ裁決ス可キ重罪ニ非スト雖モ其裁判所ニ於テ法律ヲ適用シ裁判ヲ言渡ス可シ

第二百四十六條 被告人ニ刑ヲ言渡シタル時又ハ之ヲ無罪ナリト言

渡シタル時ハ重罪裁判所ニ於テ嘗テ最初ノ證人ヲ問糺ス前ニ申出テタル民事原告人ノ申立ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ但シ其申立書ハ陪審ノ決定書ヨリ前ニ之ヲ差出ス可ク其後ニ至テハ其申立タル金高ヲ更ニ増ス可カラス

第二百四十七條 民事原告人ノ求ムル損失償高ノ討論ハ刑事ノ裁判定マリタル後ニ之ヲ爲ス可ク若シ他ノ犯罪訴訟ヲ急ニ裁判ス可キ時ハ重罪裁判所會議ノ末ニ之ヲ延ハス可シ

第二百四十八條 一旦犯罪訴訟ノ吟味手續ニ取掛リタル上ハ陪審ノ闕引ヨリ刑ノ言渡ニ至ル迄ノ間裁判所及ヒ陪審ハ他ノ犯罪訴訟ノ吟味ニ取掛ル可カラス

○第四款 重罪裁判所ノ言渡ヲ取消ス可ク及ヒ其言渡ノ如ク執行ヲ事



第二百四十九條 陪審ノ決定ハ如何ナル方法ヲ問ハス之ヲ取消サント訴フ可カラズ

第二百五十條 檢察官及ヒ被告人ハ左ノ場合ニ於テハ重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消サント訴フルヲ得可シ但シ之レカ爲メニハ第五百四十四條ニ記シタル法式ニ循フ可シ

第一 陪審ノ確的ナリト答ヘタル事柄ノ重罪輕罪註誤ニ非サル時

第二 裁判所ニ於テ法律ノ適用ヲ誤リタル時

第三 陪審ノ廻引ヨリ後ノ手續ニ緊要ナル法式ヲ缺キタル時

第二百五十一條 前條ニ記スル裁判言渡取消ノ訴ハ控訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ但シ其裁判所ノ裁判役ハ重罪裁判所ノ席ニ列ナリシ者タル可カラズ

第二百五十二條 控訴裁判所ニ於テハ其訴ヲ吟味シタル上ニテ左ノ如ク處置ス可シ

如ク處置ス可シ

第二百五十條ノ第一ニ記シタル場合ニ於テハ被告人ヲ宥怒ス可シ

第二第三ニ記シタル場合ニ於テハ呼出狀ヲ送達セシ以來ノ訴訟手續ヲ取消シ被告人ヲ更ニ他ノ重罪裁判所ニ移ス可シ

然レモ第二ノ場合ニ於テ重罪裁判所ノ言渡シタル刑當然適用ス可キ刑ヨリ更ニ重カラサル時ハ重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消ス可カラズ

第二百五十三條 重罪裁判所ノ裁判言渡書ハ控訴裁判所ノ規則書ニ定メタル場所ニ貼附シテ之ヲ公ケニ爲シ又其特定ノ場所アラサル時ハ各裁判所ニ裁判言渡書ヲ貼附スル爲メ設ケタル懸帖ト州廳ノ門ト犯罪ノ地ノ官署ノ門トニ之ヲ貼附シテ公ケニ爲ス可シ



重罪裁判所ノ裁判言渡ハ檢察官ノ求メニ因リ之ヲ執行フ可シ

○第五款 重罪裁判所ニ於テ被告人ニ抗傳ノ儘刑ヲ言渡ス事

第二百五十四條 若シ重罪ノ被告人ヲ逮捕スルヲ得ヌ又ハ之ヲ逮捕

セシ後ニ其逃亡シタル時裁判席ヲ開ク前ニ其被告人自訴セサルニ

於テハ重罪裁判所ニ於テ犯罪訴訟ノ書類ヲ取調タル上ニテ抗傳ノ

儘刑ヲ言渡ス可シ

第二百五十五條 重罪裁判所ニ於テハ陪審ノ立會ナク抗傳ノ儘刑ヲ

言渡ス可シ

第二百五十六條 逮捕スルヲ得ヌ又ハ逃亡セシ被告人ヲ呼出ス爲メ

裁判席ヲ開クヨリハ八日前ニ第二百五十二條ニ記シタル場合ニ貼

附ヲ爲シ且ツ新聞紙ニ記入シテ其出席ス可キ旨ヲ公告ス可シ

第二百五十七條 抗傳セシ被告人ノ出席セサル理由ヲ辨解スル爲メ

ノ外何人ニ限ラス其被告人ノ名代トナリテ出席スルヲ許ルサス

重罪裁判所ニ於テ其辨解ノ旨ヲ聞届クル時ハ裁判言渡ノ期日ヲ延

ハシ被告人ノ出席ス可キ期限ヲ定メ且ツ後條ニ記スル財産ノ附託

ヲ釋放ス可シ

第二百五十八條 下等裁判所ニ於テ抗傳セシ被告人ノ犯罪訴訟ヲ重

罪裁判所ニ移ス時ハ被告人ノ財産受託者ヲ任ス可シ

被告人ニ對シ爲ス可キ諸般ノ告訴ハ皆此財産受託者ニ對シ之ヲ爲

ス可シ但シ其被告人自訴シテ其抗傳ノ咎ヲ免レ且ツ其財産附託ノ

釋放ヲ得タル時ハ格別ナリトス

前項ノ場合ノ外ハ被告人ノ死去シ又ハ其刑ノ期滿免除ノ期ニ至ル

迄ハ其財産附託ヲ繼續シ置ク可シ

第二百五十九條 若シ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自訴シ又ハ其



刑ノ期滿免除ノ期ニ至テサル前ニ逮捕セラレシ時ハ抗傳ノ儘ノ裁判言渡ヲ當然取消シ重罪裁判所ニ於テ其犯罪訴訟ヲ吟味ス可シ

第二百六十條 如何ナル場合ニ於テモ一箇ノ事柄ニ付キ犯罪ノ告訴ヲ受ケタル被告人數名中ノ一人抗傳スト雖モ餘人ニ付テハ其告訴ノ裁判ヲ延ハス可カラズ但シ裁判所ニ於テ檢察官ノ申立ヲ聽キ其告訴ノ裁判ヲ次ノ會議ニ延ハス可シト思フ時ハ其旨ヲ言渡ス可ク又當時ノ會議終ラサル中ニ其抗傳セシ被告人ヲ逮捕シ得ヘシ或ハ其自訴ス可キヲ思料スル時ハ其告訴ノ裁判ヲ當時ノ會議ノ末迄延ハス可シ

○第四章 各種ノ刑法裁判所ニ通スル規則

第二百六十一條 裁判席ヲ開ク前ニ裁判所又ハ相手方ノ緊要ナル手續ヲ怠リシ旨ヲ申立ントスル者ハ最終ノ證人ヲ問糺ス前ニ之ヲ申

立テ又證人ヲ問糺スコトナキ時ハ雙方辨論ノ始マラサル前ニ之ヲ申立ツ可ク若シ其定期ヲ過コス時ハ其申立ヲ爲スノ權ヲ失フ可シ犯罪訴訟ヲ此裁判所ヨリ彼ノ裁判所ニ移ス言渡ハ本案ヲ裁判ス可キ裁判所ハ其取消ヲ訴フヘカラス但シ此規則ト被告人其訴ヘラレシ事柄ノ法律上ニ於テ罰セラル、モノニ非サルコト辨スルノ權ト相觸ル、コトナカル可シ

第二百六十二條 抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ後ニ自訴シテ其無罪タル言渡ヲ得ルト雖モ吟味手續ノ費用及ヒ其抗傳シテ受ケタル裁判言渡ノ費用ハ之ヲ償フ可キノ言渡ヲ受ク可シ

第二百六十三條 裁判所ニ於テ既ニ甲者ノ處刑ヲ言渡シタル後乙者之ト同一ノ犯罪訴訟ヲ受ケ亦其刑ヲ言渡サレ此二箇ノ言渡相抵觸シテ二人中一方ハ必ス無罪タルノ明カナルニ於テハ此二箇ノ裁判



言渡ノ執行ヲ停止ス可シ○檢察官及ヒ右ノ二人ハ何時ニ限ラズ控  
訴裁判所ニ其二箇ノ裁判言渡ヲ取消シ是レ迄ト異ナリタル裁判所  
ニ於テ其吟味ヲ受ク可キ旨ヲ訴フルコトヲ得ヘシ  
若シ右二人中ノ一人既ニ死去シタル時ハ控訴裁判ヨリ其死後ノ代  
人ヲ任シ論辨ヲ爲サシム可シ

第二百六十四條 又人ヲ殺スノ罪アリト訴ヘラレシ者其處刑ヲ言渡  
サレタル後其殺サレタリト云ヘル本人ノ現ニ生存シ又ハ其告訴ノ  
證人偽證ノ罪ヲ以テ刑ヲ言渡サレタル時ハ亦前條ノ如ク控訴裁判  
所ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ但シ證人偽證ノ罪アル時ハ控訴裁判所  
ニ於テ以前ノ裁判役其偽證ノ爲メ迷誤ヲ生シタルヤ否ヲ思料シ其  
迷誤アリト思フ時ハ右ノ控訴ヲ取上ク可シ

第二百六十五條 犯罪被告人ハ何時ニ限ラズ裁判所ヨリ其代言人ヲ

指定メント求ムルコトヲ得ヘシ但シ其代言人ハ裁判所長之ヲ指定ス  
可シ

第二百六十六條 裁判席ニ於テ犯シタル輕罪及ヒ註誤ハ其裁判所ニ  
於テ之ヲ裁判シ得可キ權限内ノモノタルハ第二百四十九條 此條數  
ハ原書ノノ規則ニ管セス直チニ其席ニ於テ之ヲ裁判ス可シ  
若シ裁判席ニ於テ重罪ヲ犯シタル時又ハ前項ノ場合ニ於テ裁判所  
ニ其犯罪ヲ裁判ス可キ權ノアラサル時ハ其犯罪ノ吟味ヲ檢事局ニ  
移ス可シ

如何ナル場合ニ於テモ裁判所長其犯罪ノ調書ヲ記シ書記官之ニ姓  
名ヲ手署ス可シ又犯人ヲ逮捕ス可キ模様アル時ハ之ヲ捕ヘテ拘留  
ス可シ

第二百六十七條 犯罪被告人ノ爲メ民事上ノ償ヲ擔當ス可キ者ハ其



被告人ト同期限内ニ之ヲ呼出ス可シ  
右ノ者ハ民事原告人又ハ官府ニ對シテ裁判所費用ヲ償フ可ク又民事原告人ニ損害ノ償ヲ爲ス可シ但シ罰金ハ之ヲ言渡サル、コナカ  
ル可シ

第二百六十八條 民法裁判所又ハ商法裁判所ニ訴ヲ爲ス者ハ其事ニ付キ亦民事原告人トナリテ刑法裁判所ニ訴ヲ出ス可カラズ

民事原告人ハ下吟味掛リ裁判役又ハ裁判所長ノ見積ニ從ヒ裁判費用高ヲ裁判所ニ預ク可シ

吟味手續ヲ爲ス間ニ追加ス可キ裁判費用高モ亦之ヲ預ク可ク且ツ之ヲ見積ル方法モ亦前項ト同一ナル可シ○重罪裁判所ニ於テ裁判ヲ爲シタル時ノ外ハ民事原告人ノ求ムル損失償高ニ付テノ裁判言渡ヲ訴訟法ニ記スル期限内ニ控訴スルヲ得可ク又其控訴ハ訴訟法

ニ定メタル裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 裁判席ニ於テ生スル附帶ノ訴ハ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上簡約ノ法式ヲ以テ至急ニ之ヲ裁判ス可シ

第二百七十條 若シ掛リ裁判役兩名又ハ裁判所兩箇ニテ一箇ノ犯罪訴訟ヲ吟味シ未タ其中ノ一方ニ定ム可キノ言渡アラサル時ハ雙方ノ中先キニ手續ヲ爲ス者ヨリ控訴裁判所ニ願出シ此裁判所ニ於テ其訴訟ヲ右裁判役兩名又ハ裁判所兩箇中ノ一ニ任カス可キヲ定メ之ニ證書類ヲ送達セシム可シ

○第五章 期滿免除ノ事

第二百七十一條 重罪ノ處刑ハ其言渡ノ時ヨリアラビ一歴十ケ年ヲ以テ期滿免除ノ期限トス

第二百七十二條 輕罪ノ處刑ハ其期滿免除ノ期限ヲ三ケ年トス



第二百七十三條 註誤ノ處刑ハ其期滿免除ノ期限ヲ一ケ年トス但シ  
控訴又ハ故障申立ヲ爲ス可キ時ハ裁判言渡ノ確定セシ日ヨリ其期  
限ヲ算ス可シ

第二百七十四條 刑事ノ訴ハ重罪ニ付テハ其犯罪ノ日又ハ最終ノ下  
吟味手續ノ日ヨリ五ケ年ヲ以テ期滿免除ノ期限トシ又輕罪ニ付テ  
ハ三ケ年註誤ニ付テハ六ケ月ヲ以テ右ノ期限トス

第二百七十五條 下吟味ノ手續ヲ爲ス時ハ前條ニ記スル期滿免除ノ  
期限ノ經過ヲ停止ス可シ縱令其手續ニ管セサル者ニ付テモ亦同一  
タル可シ

第二百七十六條 處刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ル時ハ其處刑ノ裁判言  
渡ヲ確定ノモノト爲ス可シ

第二百七十七條 重罪、輕罪、註誤ニ付キ損失ノ償ヲ得ント求ムル民事  
ノ訴ハ既ニ刑事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ニ至リシ後ハ刑法裁判所ニ

之ヲ爲ス可キ許サス  
又未タ刑事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ニ至ラサル前ニ民事ノ訴ヲ爲ス

時ハ刑事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ノ經過ヲ停止ス可シ



埃及法治罪法草案終  
律書

謬誤追正

- 四二 第六行 [入額所得]ハ[エシテラライ]ノ誤  
エシテラライ
- 四七 第十一行 [所得]ハ[所有]ノ誤
- 四九 第十一行 [義務ニ]ハ[ハ]ノ誤
- 五〇 第二行 [ラ]ハ[チ]ノ誤
- 五二 第十二行 [縁]ハ[縁]ノ誤
- 五九 第六行 [所有]ノ下[者]字ヲ脱ス
- 八一 第九行 [做シ]ノ上[看]字ヲ脱ス
- 九〇 第十行 [感]ハ[惑]ノ誤
- 九二 第七行 [可キ]ノ下[者]ノ二[字]ヲ脱ス
- 一〇二 第一行 [契約]ノ下[シ]字ヲ脱ス
- 一 第十一行 [提]ハ[提]ノ誤



二

- 一一六 第十一行 [相手方ノ]ハ[チ]ノ誤
- 一一九 第七行 [可カラス]ハ[可シ]ノ誤
- 一二〇 第一行 [檢危]ハ[檢印]ノ誤
- 一二六 第三行 [セシム]ノ下[得]字衍
- 一二八 第十二行 [使官]ハ[使吏]ノ誤
- 一三一 第九行 [時ニ]ハ[特ニ]ノ誤
- 一三五 第四行 [非サシ]ハ[レ]ノ誤
- 一三六 第十二行 [行フヲ]ハ[チ]ノ誤
- 一三七 第一行 [効害]ハ[妨害]ノ誤
- 一四〇 第二行 [其産屋]ハ[其家産]ノ誤
- 一四二 第二行 [包含]ハ[包含]ノ誤
- 一四八 第六行 [賣主]ノ下[買主]二字ヲ脱ス

一六二

- 一六二 第三行 [之シ]ハ[之レ]ノ誤
- 一六六 第五行 [證書] [登記] [左傍原語ヲ脱ス]  
トランズ クリフシヤン
- 一七一 第八行 [其ノ]ノ間[者]字ヲ脱ス
- 一七二 第一行 [書契約]ハ[契約書]ノ倒植
- 一七三 第十行 [於テ]ノ下[ハ]字ヲ脱ス
- 一七三 第十行 [〇]ハ[修]字ノ誤
- 一八三 第五行 [契約書]ハ[ニ]ノ誤
- 一九一 第十一行 [産主]ハ[雇主]ノ誤
- 一九一 第二行 [セシメン]ハ[セシメシ]ノ誤
- 一九九 第七行 [分派セシ]ハ[分派セン]ノ誤
- 二〇〇 第五行 [評價]ノ下[人]字ヲ脱ス
- 二〇〇 第五行 [訴訟]ハ[ニ]ノ誤

三



四

- 二〇六 第二行 「如何チ」ハ「コ」ノ誤
- 二五九 第十一行 「受合」ハ「セルチファイカ」ノ誤  
セルチファイカ
- 二六五 第三行 「ナリ」ハ「アリ」ノ誤
- 二六六 第四行 「此レ」ノ下「ハ」字ヲ脱ス
- 二六七 第三行 「借主」ノ下「ノ」字ヲ脱ス
- 二七三 第十行 「ニ」字横植
- 二七四 第十一行 「ルキ」ノ間「シ」字ヲ脱ス
- 二八四 第一行 「ヲタ」ハ「ヲモ」ノ誤
- 二八五 第五行 「船」ノ下「長」字ヲ脱ス
- 二八八 第三行 「航長」ハ「船長」ノ誤
- 二九六 第八行 「證スル」ノ下「レ」ヲ脱ス  
「背」ハ「背ク」ノ誤

五

- 二九七 第四行 「船路」ノ右傍「ハ」ヲ脱ス
- 三〇二 第四行 「承諾」ハ「承諾」ノ誤
- 三一〇 第八行 「箇條」ノ下「チ」字ヲ脱ス
- 三一五 第二行 「日數」ノ「ハ」ヲ「チ」ノ誤
- 三一六 第五行 「其借」ノ下「入」字ヲ脱ス
- 三四三 第四行 「ト」ハ「ト」ヲ「ナ」ノ誤
- 四一三 第六行 「附觀」ハ「附記」ノ誤
- 四一六 第九行 「送達」ニ「ハ」ヲ「チ」ノ誤
- 四二三 第十二行 「浚」ハ「フ」ノ誤
- 四三一 第三行 「至急吟味」ノ下「訴訟」二字ヲ脱ス
- 四四〇 第二行註 「佛訴訟」ノ下「法」字ヲ脱ス
- 第七行註 「第百」ノ間「四」字ヲ脱ス



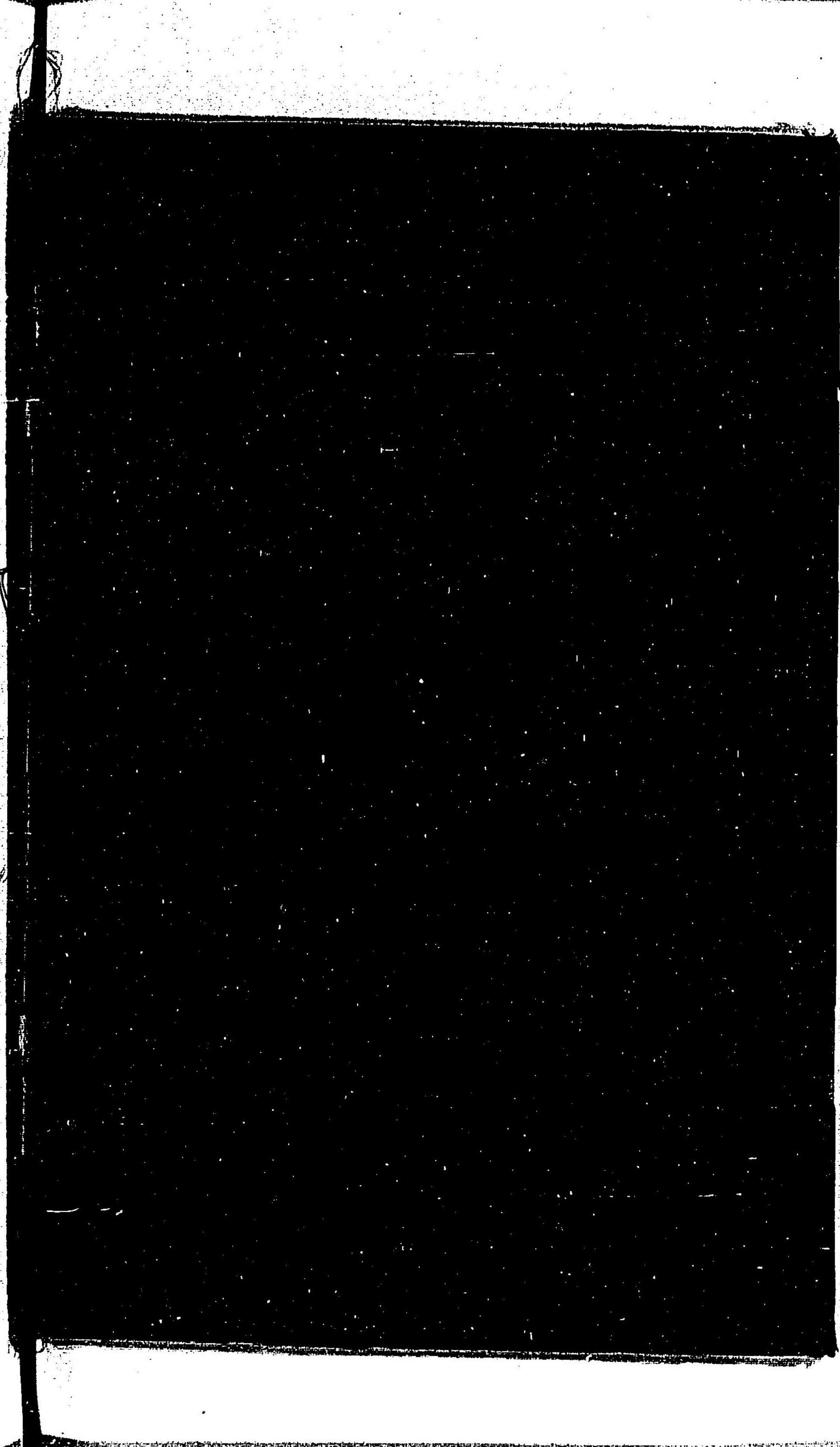
六 四六四 第五行 [判判]ハ共ニ[裁判]ノ誤  
四七一 第二行 [背]ハ[背]ノ誤  
四七六 第十行 [警]ハ[誓]ノ誤  
六九九 第七行 [第二章]ハ[第三章]ノ誤

謬誤進正畢



21  
172







030831-000-2

CE2-3-01

埃及法律書

箕作 麟祥/訳

M11

BBC-0012

